

市来町埋蔵文化財発掘調査報告書(9)

市来町湊土地区画整理事業江郷墓地整備基本計画に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

# 梅巖寺跡

戸崎地区漁業集落環境整備事業集落道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

# 戸崎原遺跡

2001年3月

鹿児島県日置郡市来町教育委員会

## 序 文

本報告書は市来町湊土地区画整理事業江郷墓地整備基本計画に伴って調査がなされた「梅巖寺跡」と、戸崎地区漁業集落環境整備事業集落道建設に伴って調査がなされた「戸崎原遺跡」の発掘調査報告書であります。

本町は東シナ海に接し、中世の頃は大陸との交易も盛んで、町内にもそれを物語るように中世の貿易陶磁器が出土する遺跡が数多く見られます。吹上浜に落ちる夕陽をバックに船が航行している姿を眺め、悠久の時に思いを巡らすと古代の人々の力強い生活力と、行動力に深い感銘を覚えます。市来町天神町の江郷墓地付近は、源頼朝の愛人であったとされる丹後局が亡くなられた後、側に使っていた者が局の菩提を弔うために建てたと言われる梅巖寺があったとされています。今回の調査では直接この寺に関係するものは出土しませんでした。中世から近世にかけての陶磁器が多量に出土しました。この梅巖寺跡から出土した中世や近世の陶磁器を手にとって見つめていると、今何もかもが便利になり、使い捨ての世の中に生活している我々に何かを語りかけているような気がいたします。

戸崎原遺跡は、平成六年度に確認調査がなされ、平成十一年度に道路部分の全面発掘調査が実施されました。遺跡からは旧石器時代の人々の生活道具や石蒸し料理をしたであろうと思われる遺構が多数検出されました。この遺跡は東市来町に近い戸崎漁港付近の丘陵に位置しています。この遺跡から出土した遺物を使用していた古代人もこの市来の海を見つめていたのかも知れません。

このように本町の歴史を物語る貴重な資料である本報告書が、町民をはじめ広く活用され、文化財の周知とご理解の一助になれば幸いに存じます。

最後になりましたが、本報告書をまとめるにあたり、多大なご協力をいただきました鹿児島市教育委員会の出口浩氏、発掘作業及び整理作業に従事された方々に対し、深く感謝申し上げます。

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	ばいがんじあと・とさきばるいせき							
書名	梅巖寺跡・戸崎原遺跡							
刊次	1							
シリーズ名	市来町埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第9集							
編著者名	新町正・出口浩・西村健一							
編集機関	市来町教育委員会							
所在地	鹿児島県日置郡市来町湊町3305番地							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ばいがんじあと 梅巖寺跡	かごしまけん 鹿児島県 ひおきぐん 日置郡 いちきちよう 市来町 みなとまち 湊町	4636 12	60	31度 43分 48秒	130度 17分 35秒	H 5・9・13 ～ H 5・9・24	1558m <sup>2</sup>	市来町湊土 地区画整理 事業江郷墓 地整備
とさきばるいせき 戸崎原遺跡	かごしまけん 鹿児島県 ひおきぐん 日置郡 いちきちよう 市来町 おおさと 大里		52			確認 H 6・10・3 H 6・10・17 全面 H 11・11・25 H 11・12・10	30000m <sup>2</sup>  45m <sup>2</sup>	戸崎地区漁 業集落環境 整備事業集 落道建設
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
ばいがんじあと 梅巖寺跡		古墳 中世 近世		土坑・柱穴 溝		成川式土器 青磁 近世陶磁器		
とさきばるいせき 戸崎原遺跡		旧石器  縄文  古墳 近世		集石遺構  住居址状落 ち込み 溝 柱穴		細石刃・細石刃 核  成川式土器		掘り込みを持つ 集石遺構

## 例 言

1. 本書は市来町湊土地区画整理事業江郷墓地整備基本計画に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書「梅巖寺跡」及び戸崎地区漁業集落環境整備事業集落道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書「戸崎原遺跡」の合本である。
2. 梅巖寺跡及び戸崎原遺跡の発掘調査は、市来町が調査主体となり、市来町教育委員会が実施した。
3. 梅巖寺跡の執筆・編集等及び遺物撮影には市来町教育委員会の新町・鹿児島市教育委員会の出口浩があたった。戸崎原遺跡の執筆・編集等及び遺物撮影には市来町教育委員会の新町があたった。
4. 本書に用いたレベル数値は、海拔絶対高である。
5. 本書に用いた遺物番号は、遺跡ごとに土器・石器の種類に関係なく通し番号とし、挿図・図版の番号と同一である。
6. 梅巖寺跡出土遺物の実測・トレースは鹿児島市教育委員会の出口が主にあたり、遺構に関しては新町・坂口・児玉・松崎があたった。戸崎原遺跡の実測・トレースは新町・児玉・坂口・松崎が担当した。

# 本文目次

序文

報告書抄録

例言

目次

## <梅巖寺遺跡>

第1章 梅巖寺跡調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 報告書作成の組織	1
第3節 調査の組織（当時）	1
第4節 調査の経過	1
第2章 遺跡の位置及び環境	2
第1節 遺跡の位置及び環境	2
第3章 発掘調査の概要	4
第1節 確認調査	4
第2節 標準土層	4
第3節 各トレンチの概要	4
第4章 出土遺物・遺構の概要	7
第1節 第1トレンチ出土遺物・遺構	7
第2節 陶磁器溜り出土の遺物	15

## <戸崎原遺跡>

第1章 戸崎原遺跡確認調査の経過	39
第1節 調査に至るまでの経過	39
第2節 報告書作成の組織	39
第3節 調査の組織（当時）	39
第4節 調査の経過	39
第2章 遺跡の位置及び環境	42
第1節 遺跡の位置及び環境	42
第3章 発掘調査の概要	44
第1節 確認調査	44
第2節 標準土層	44
第3節 各トレンチの概要	46
第4節 トレンチ出土遺物・遺構	46
第4章 戸崎原遺跡全面発掘調査の経過	55
第1節 調査に至るまでの経過	55
第2節 調査の組織（平成11年当時）	55
第3節 調査の経過	55
第5章 全面発掘調査の概要	58

第1節 発掘調査	58
第2節 調査区の土層	58
第6章 II層出土遺物遺構の概要	62
第1節 II層出土遺物	62
第2節 II層出土遺構	62
第7章 III層出土遺物遺構の概要	62
第1節 III層出土遺構	62
第8章 V層出土遺物遺構の概要	63
第1節 V層出土遺物	63
第2節 V層出土遺構	63
第9章 まとめ	67
あとがき	79

## 挿 図 目 次

### <梅巖寺跡>

第1図 周辺遺跡分布図	3
第2図 トレンチ配置図	5
第3図 土層断面図	6
第4図 遺構（一）	8
第5図 遺構（二）	9
第6図 遺構（三）	10
第7図 遺構（四）	11
第8図 遺構（五）	12
第9図 遺構（六）	13
第10図 遺構配置図	14
第11図 染付碗実測図	20
第12図 染付碗・皿実測図	21
第13図 染付碗・皿・薩摩茶家他実測図	22
第14図 薩摩甕・鉢・摺鉢実測図	23

### <戸崎原遺跡>

第1図 周辺遺跡分布図	40
第2図 トレンチ配置図	43
第3図 トレンチ土層断面図	45
第4図 掘建柱建物跡	47
第5図 トレンチ出土遺物（一）	48
第6図 トレンチ出土遺物（二）	49
第7図 トレンチ出土遺物（三）	50

第8図	出土遺物分布図	51
第9図	掘り込みを持つ石集遺構 (SS-1号)	52
第10図	石集遺構 (SS-2号)	53
第11図	発掘調査部分	56
第12図	土層断面図 (南東)	57
第13図	PIT配置図	59
第14図	柱穴遺構図	60
第15図	住居址状遺構 (SC-1号)	61
第16図	出土遺物 (一)	64
第17図	出土遺物分布図	65
第18図	石集遺構 (SS-3号)	66

## 表 目 次

### <梅巖寺跡>

表1	梅巖寺跡周辺の遺跡及び指定文化財	2
表2	梅巖寺出土陶磁器分類表	16
表3	梅巖寺出土染付磁器系遺物分類表	17
表4	梅巖寺出土黒薩摩焼遺物分類表	18
表5	梅巖寺出土遺物観察表(1)	26
表6	梅巖寺出土遺物観察表(2)	27

### <戸崎原遺跡>

表1	周辺の遺跡	42
表2	確認調査出土遺物観察表	54
表3	柱穴状遺構一覧	62
表4	住居址状遺構	62
表5	全面発掘調査出土遺物観察表	63

## 図 版 目 次

### <梅巖寺跡>

第1図	梅巖寺跡発掘調査 (一)	31
第2図	梅巖寺跡発掘調査 (二)	32
第3図	梅巖寺跡発掘調査 (三)	33
第4図	梅巖寺跡発掘調査 (四)	34
第5図	梅巖寺跡発掘調査 (五)	35

## <戸崎原遺跡>

第1図	戸崎原遺跡確認調査 (一).....	71
第2図	戸崎原遺跡確認調査 (二).....	72
第3図	戸崎原遺跡全面調査 (一).....	73
第4図	戸崎原遺跡全面調査 (二).....	74
第5図	戸崎原遺跡全面調査 (三).....	75
第6図	戸崎原遺跡全面調査 (四).....	76
第7図	戸崎原遺跡出土遺物 (一).....	77
第8図	戸崎原遺跡出土遺物 (二).....	78





# 第1章 梅巖寺跡調査の経過

## 第1節 調査に至るまでの経過

市来町湊土地区画整理事業江郷墓地整備計画を進めていた市来町役場都市計画課は、当該地の埋蔵文化財の有無を市来町教育委員会に照会した。市来町教育委員会は、江郷墓地周辺は中世の頃に建立された梅巖寺跡があることを確認し、且つ周辺で成川式土器の破片を表面採集している旨を伝えた。そこで協議の結果、確認調査を実施することになる。

## 第2節 報告書作成の組織

調査主体者	市来町教育委員会		
調査責任者	〃	教 育 長	江 口 英 雄
調査庶務	〃	社会教育課長	宇 都 隆 雄
	〃	社会教育係長兼文化振興係長	
	〃		(1月より) 逆 瀬 川 正
	〃	派遣社会教育主事	濱 田 智 男
	〃	主 任	芹ヶ野 幸 淑
報告書担当者	〃	主 査	新 町 正 一
	〃	主 事	西 村 健 一

## 第3節 調査の組織（当時）

調査主体者	市来町教育委員会		
調査責任者	〃	教 育 長	松 崎 孝
調査庶務	〃	社会教育課長	橋 口 正 己
	〃	派遣社会教育主事	
兼社会教育係長	吉 嶺 梓		
	〃	主 事 補	奥之園 勝
調査担当者	〃	主 事	新 町 正 一
調査指導	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文 化 財 主 事	牛ノ濱 修

## 第4節 調査の経過

調査は平成5年9月13日から9月24日まで実施された。調査の経過は日誌抄をもってかえることにする。

9月13日（月）1トレンチ・2トレンチ設定。掘り下げ。

14日（火）朝から雨のため、道具整理、図面整理。午前中で作業中止。

15日（水）敬老の日で休み。

16日（木）1トレンチ・2トレンチ、掘り下げ。

17日（金）2トレンチ掘り下げ終了。1トレンチ遺構検出。

20日（月）1トレンチ遺構検出。掘り下げ。3トレンチ設定、掘り下げ。

県立埋蔵文化財センター牛ノ濱修文化財主事に現場指導を受ける。

21日（火）雨のため作業中止。図面整理。

- 22日（水）雨のため作業中止。図面整理。
- 23日（木）秋分の日。
- 24日（金）3トレンチ掘り下げ終了。1トレンチ遺構検出。遺物取り上げ。
- 27日（月）4トレンチ設定、掘り下げ。1トレンチ遺構検出。遺物取り上げ。
- 28日（火）4トレンチ終了。1トレンチ遺構検出、拡張。午前中で作業中止。
- 29日（水）日置教育事務所長現場視察。
- 30日（木）雨のため作業中止。
- 10月1日（金）2～4トレンチ埋め戻し。1トレンチ遺構検出。
- 10月4日（月）1トレンチ埋め戻し。道具の搬入。

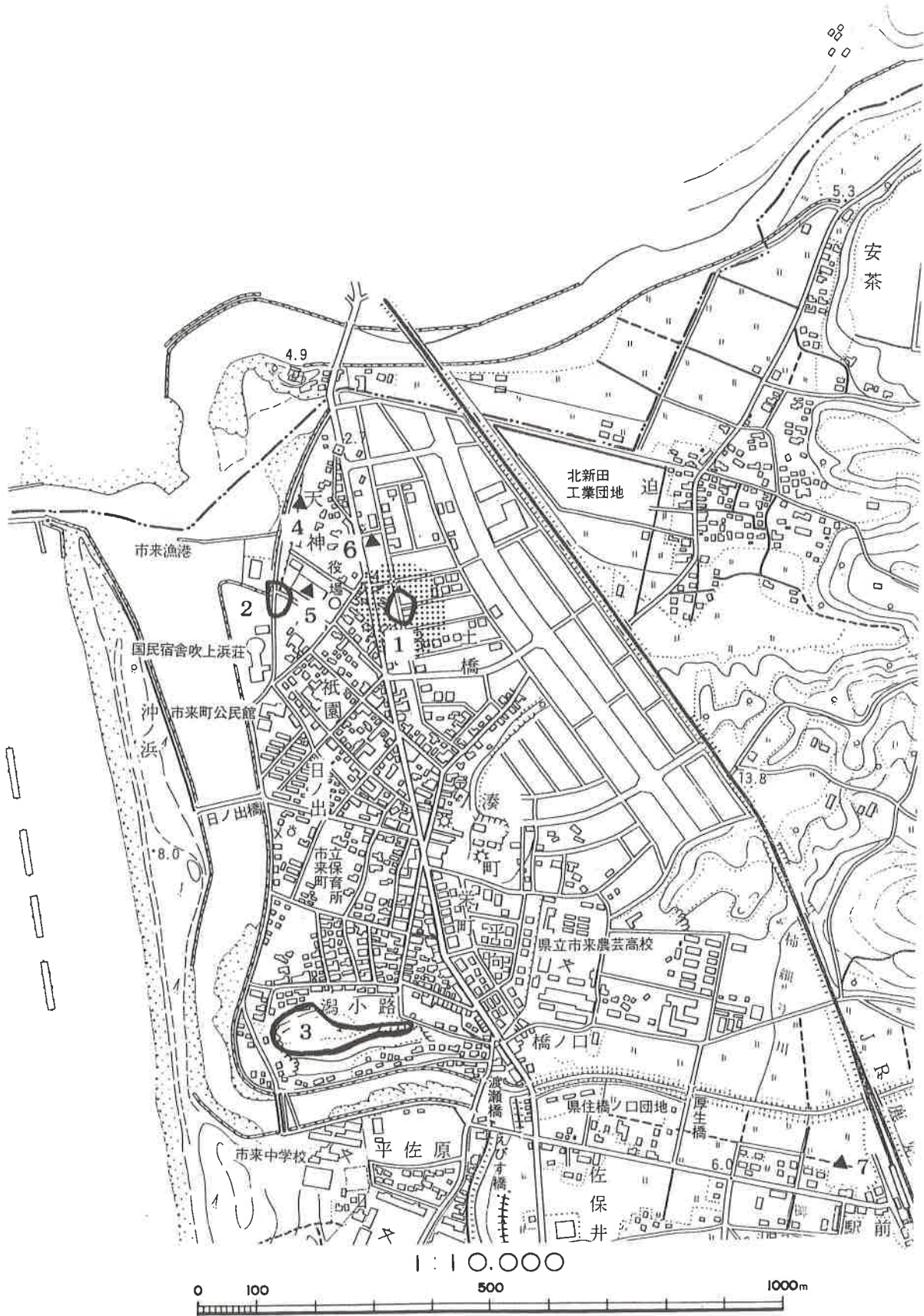
## 第2章 遺跡の位置及び環境

### 第1節 遺跡の位置及び環境

市来町は日置郡の最北端に位置し、北は串木野市と境を接し、南から東には東市来町と接している。東側は山地が多く、西側には吹上浜が広がっている。西側に流れる八房川下流域と南西に流れる大里川下流域には平野が広がっている。この平野部に接するように山間部から出た小台地があり、この台地には各時代の遺跡が存在している。梅巖寺跡は先に述べた川の河口付近に所在し、付近には川口番所跡や地頭仮屋跡、町門の跡などの町指定文化財がある。これらの指定文化財がある湊町は、中世の頃より貿易港として栄え、地名にも唐人町の名が見える。梅巖寺は中世の頃に、丹後の局が亡くなった後、その侍女が冥福を祈るために建てたと江戸時代に書かれた三国名勝図絵に記載されている。丹後の局とは源頼朝の愛人で、島津初代忠久の母であると言われている。伝説では、頼朝の妻である北条政子の嫉妬を恐れ、遠く薩摩の国に逃がされ、当時市来の地に居た惟宗廣言と婚姻し、忠久を生んで育てたとされている。また、墓は市来町大里の来迎寺跡の敷地内に局の墓と伝えられるものがある。

表1 梅巖寺跡周辺の遺跡及び指定文化財

	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物
1	梅巖寺跡	市来町湊町		中世～近世	成川式土器・中近世陶磁器
2	西町遺跡	市来町湊町	駐車場	中世	青磁碗・砥石
3	小原遺跡	市来町湊町	丘陵	縄文・弥生	土器
4	川口番所跡	市来町湊町	公園	近世	
5	御仮屋跡	市来町湊町	役場	近世	石垣
6	町門の跡	市来町湊町	消滅	近世	
7	船着場跡	市来町湊町	田圃	伝中世	



第1図 周辺遺跡分布図

## 第3章 発掘調査の概要

### 第1節 確認調査

発掘調査場所が墓地敷地内及びその近隣で、トレンチは空き地など合計4ヶ所設定した。トレンチの長さは以下の通りである。

- 1 トレンチ 00m×00m      2 トレンチ 10m×1.5m  
3 トレンチ 1.5m×1.5m    4 トレンチ 1.5m×2 m

### 第2節 標準土層

確認調査で土層が確認できたのが第1トレンチで、その他の場所は墓穴を掘るために攪乱されていて確認できなかった。

盛土	シラス盛土
I層 表土	
II層 黒色砂質土層	
III層 黄褐色砂質土層	中世・近世の包含層
IV層 淡黄褐色砂質土層	遺構検出面  ここでは地山として扱った。

### 第3節 各トレンチの概要

#### 第1トレンチ

攪乱層より、近世陶磁器・土器片・成川式土器・土師器・瓦器・軽石製品・寛永通宝・獣骨などが出土し、II層より近世陶磁器・煙管・円盤状陶器片・鉄釘・鉄製品が出土した。

遺構は柱穴が8、土坑が6基、溝が1基検出できた。

#### 第2トレンチ

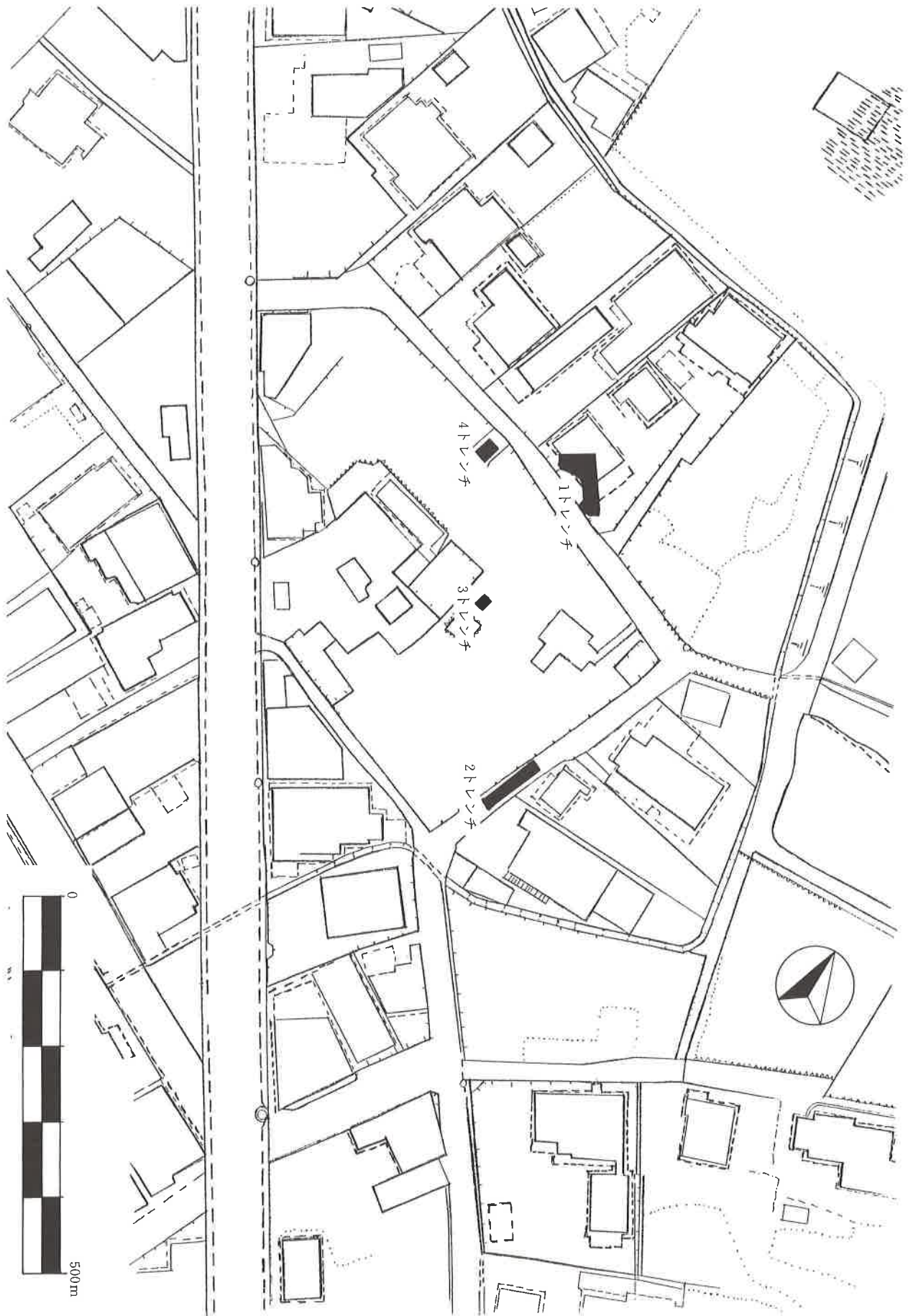
攪乱層より、近世陶磁器が出土。包含層は破壊されていた。

#### 第3トレンチ

攪乱層より、近世陶磁器が出土。包含層は破壊されていた。

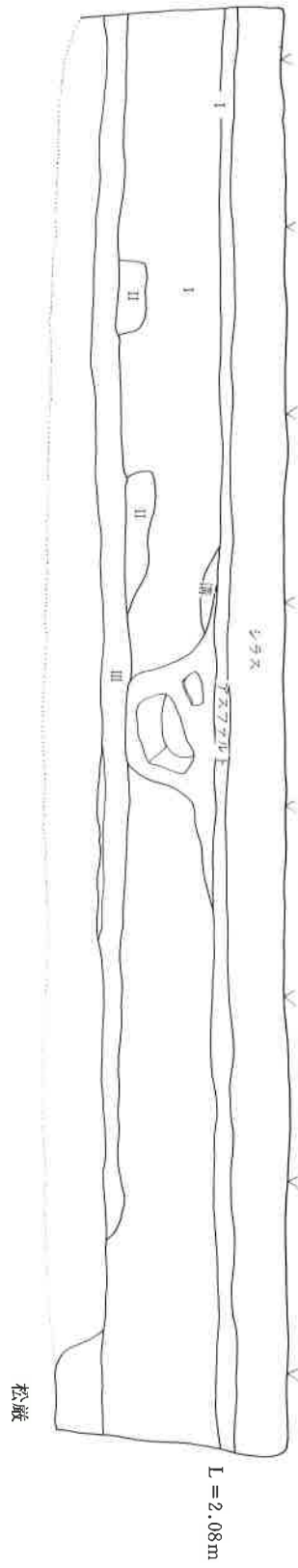
#### 第4トレンチ

攪乱層より、近世陶磁器が出土。包含層は破壊されていた。

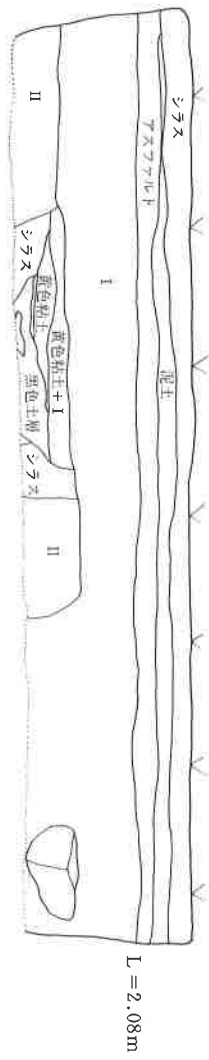


第2図 トレンチ配置図

東側断面図



北側断面図



第3図 土層断面図

## 第4章 出土遺物・遺構の概要

### 第1節 第1トレンチ出土遺物・遺構

出土遺物のほとんどは第1トレンチからの出土である。第1トレンチは最終的には土坑が7基、PITが8、溝が2本検出され、その中から出土したものである。また、東側には陶磁器溜りがあり、古くは成川式土器から近世陶磁器まで出土した。以下、各遺構の説明と共に遺物を見てみることにする。

#### 1. SK-1

SK-1は黄色の粘土を円形に敷き詰めて、中央部は少々くぼんでいる。この窪みにはシラスが埋まっていた。大きさは長軸約90cm、短軸80cmである。遺物は検出されなかった。

#### 2. SK-2

SK-2は楕円形の土坑で、長軸90cm、短軸45cm、深さは検出面から18cmである。礫が埋まっていた。

#### 3. SK-3

SK-3は円形の土坑で黄色の粘土で丸く整形されている。黄色粘土はSK-1と同一のものであると思われる。土坑内部には陶磁器のほか、鉄製の刃物、円盤状陶器片が検出された。

#### 4. SK-4

SK-4は円形の土坑でシラスを下部に敷き詰め、更に黄色の粘土を中央部分に敷き、その上に摺鉢が置かれていた。黄色粘土はSK-1と同一のものであると思われる。

#### 5. SK-5

SK-5は楕円形の土坑で、大きさは遺構確認面で、縦軸1.55m、横軸65cm、深さ40cmである。遺構内部には、礫が多くその他、鉄製品が見受けられた。

#### 6. SK-6

SK-6は遺構確認面での形は長方形を呈していたが精査した後、正方形の土坑が中心となると思われる。遺物は軽石製品が出土している。

#### 7. SK-7

SK-7はトレンチ壁付近から検出された。楕円形の土坑であると思われる。遺物は近世の染付が出土している。

#### 8. SK-8

SK-8もSK-7と同様にトレンチ壁付近から検出され、楕円形の形状を有していると思われる。内部には墓の前に備えられる花置き台の一部と思われる石製品が出土している。

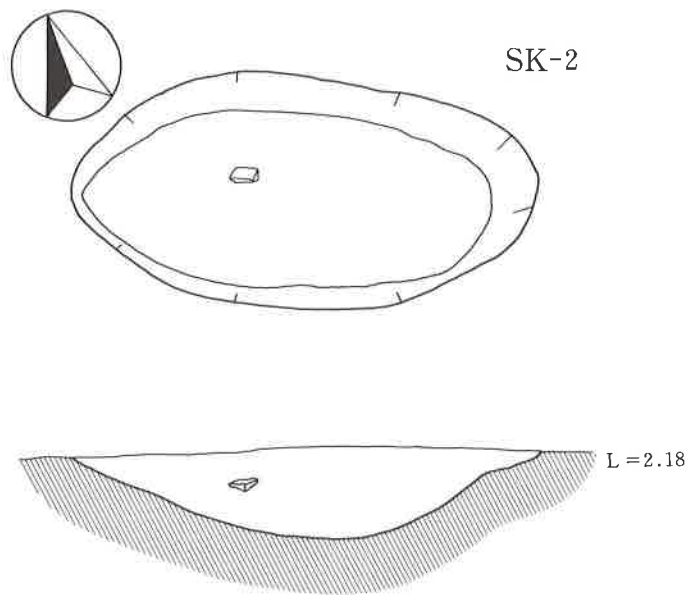
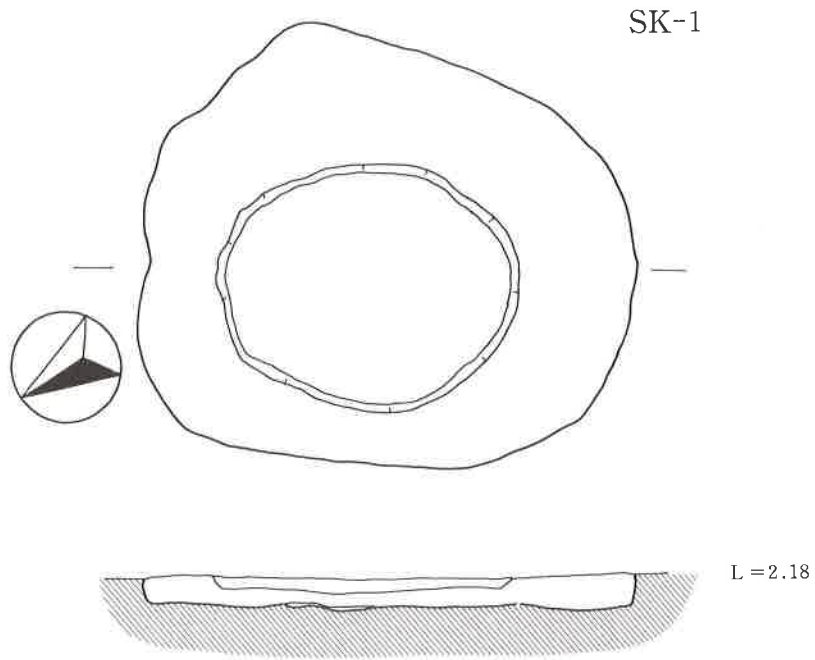
#### 9. SD-1・2

SD-1・2はいずれも溝で、長さは余り長くない。遺物等は検出されなかった。

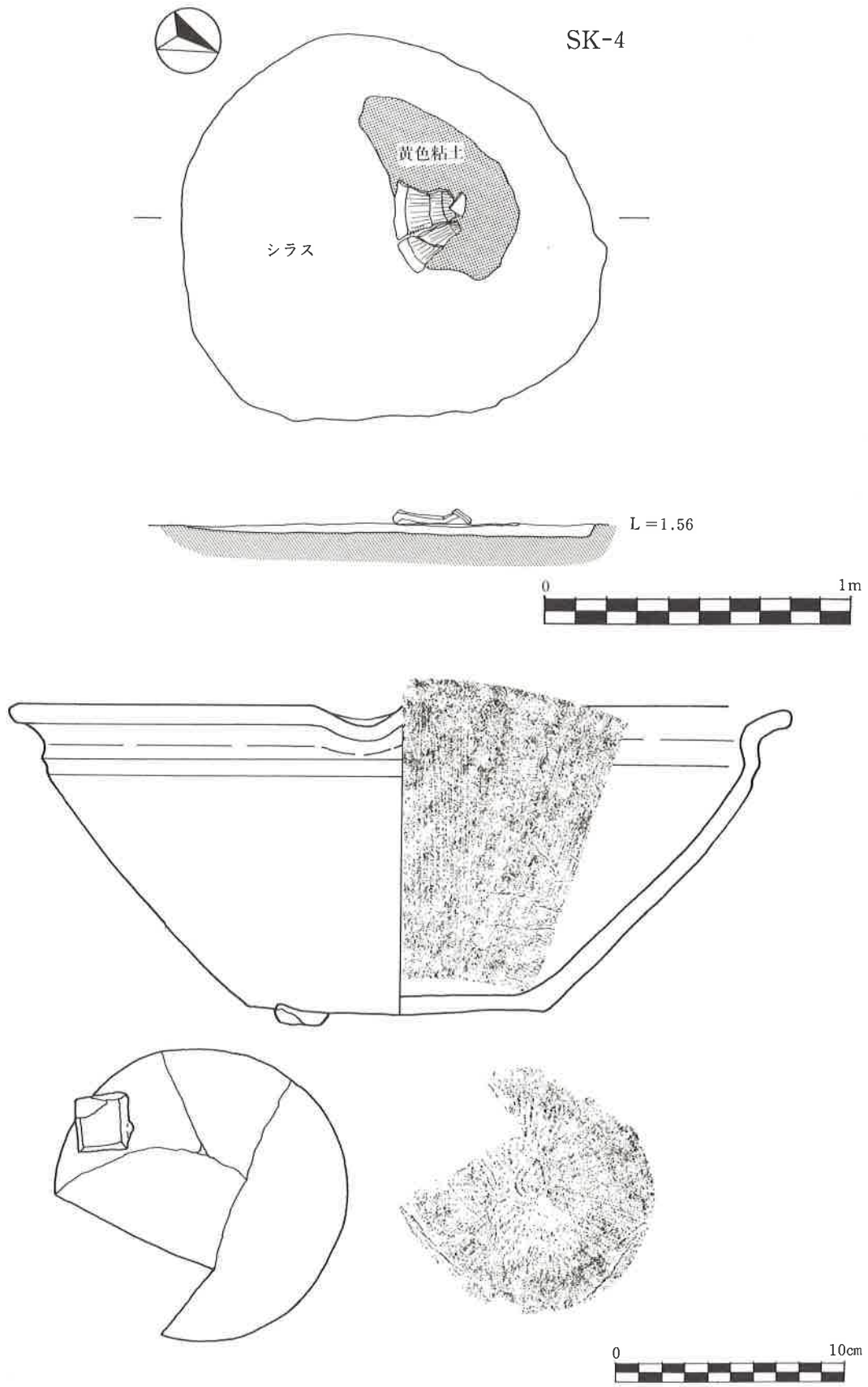
#### 10. PIT (1~8)

PITは一番大きいもので27cm、小さなものは13cmである。建物跡になるような配列は特に見受けられなかった。



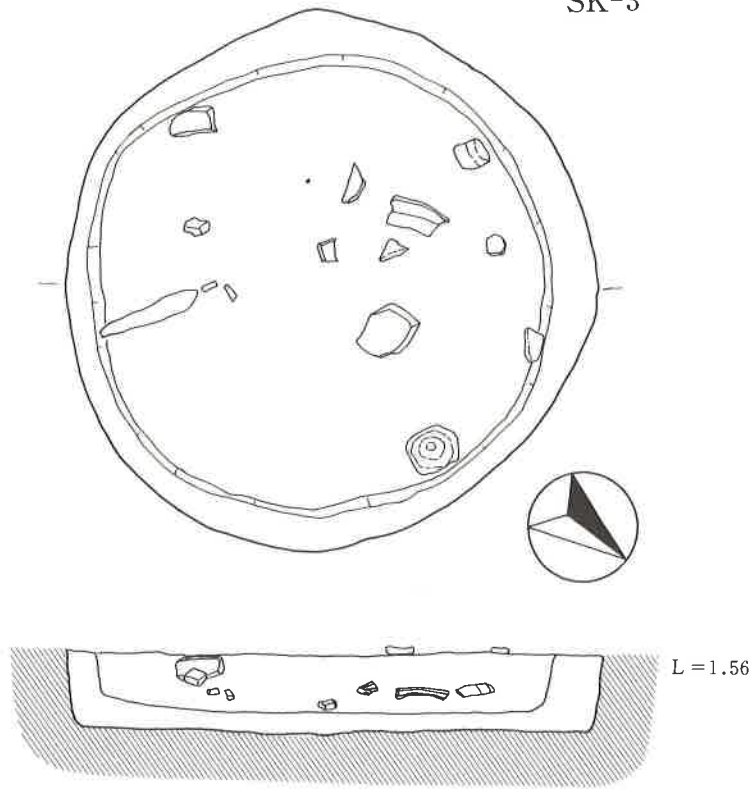


第4図 遺構（一）

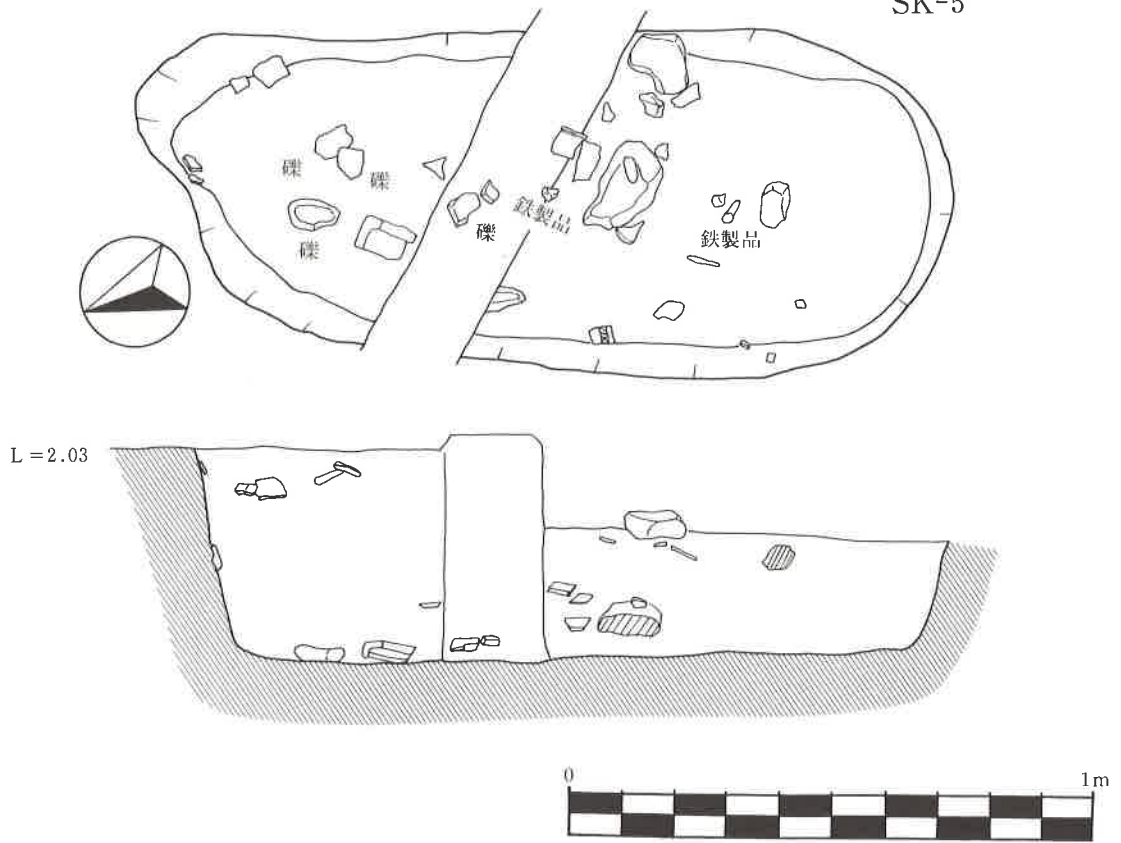


第5図 遺構(二)

SK-3

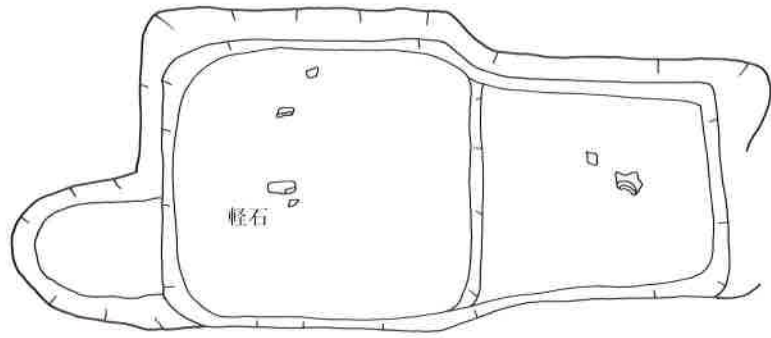


SK-5

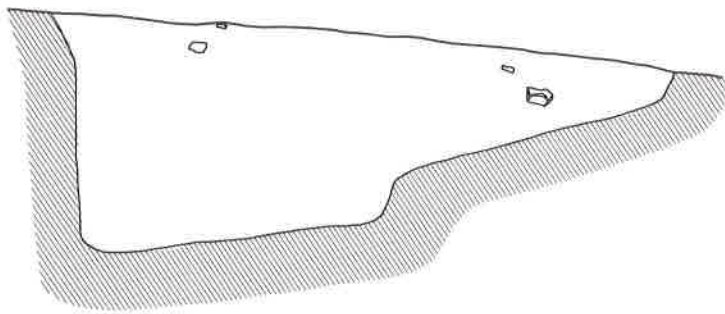


第6図 遺構(三)

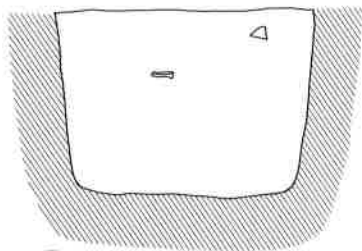
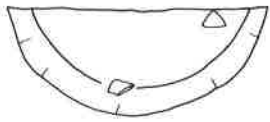
SK-6



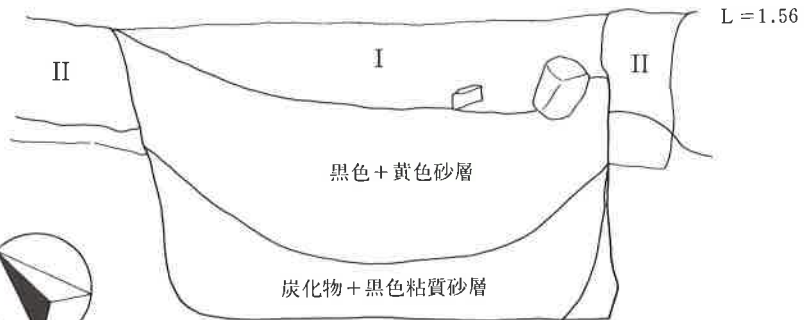
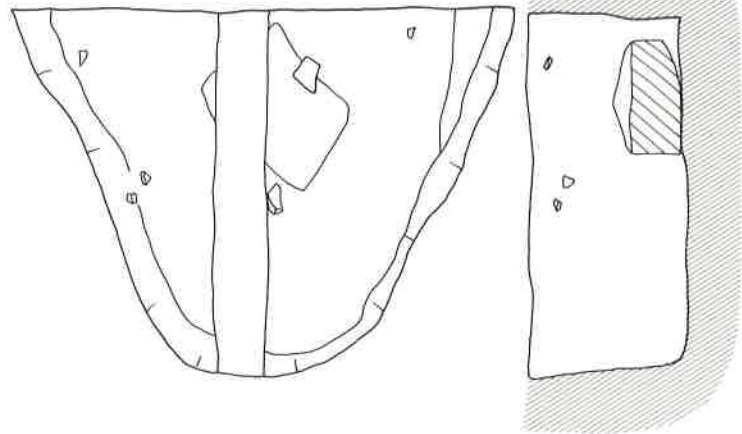
L = 2.00



SK-7

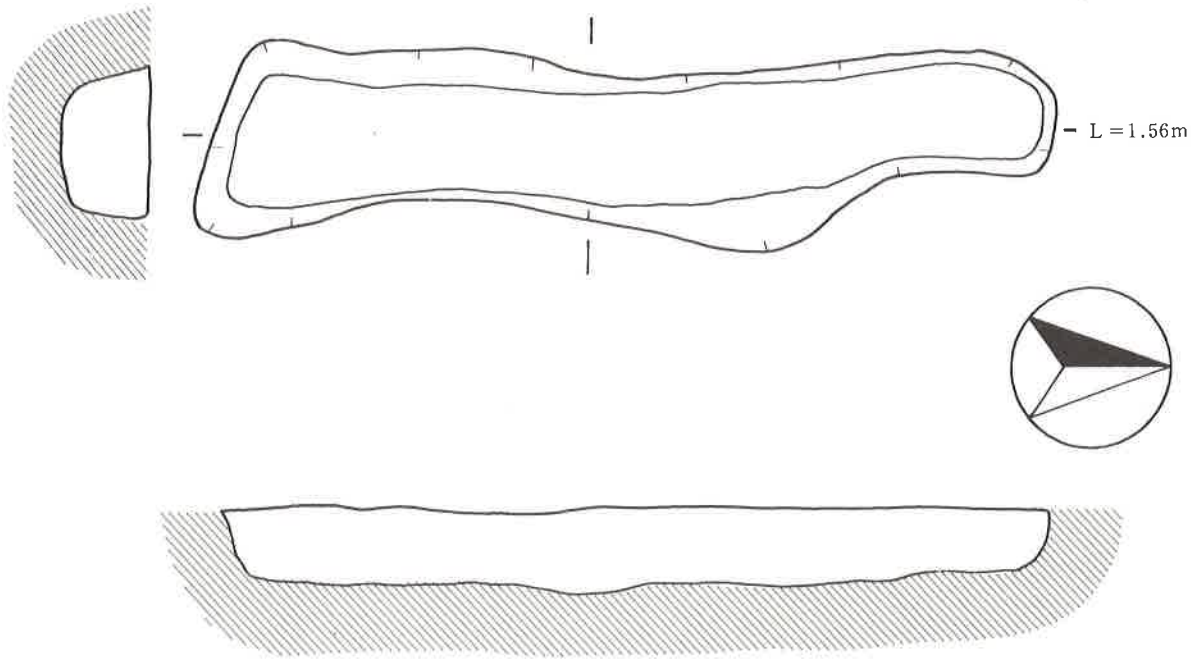


SK-8

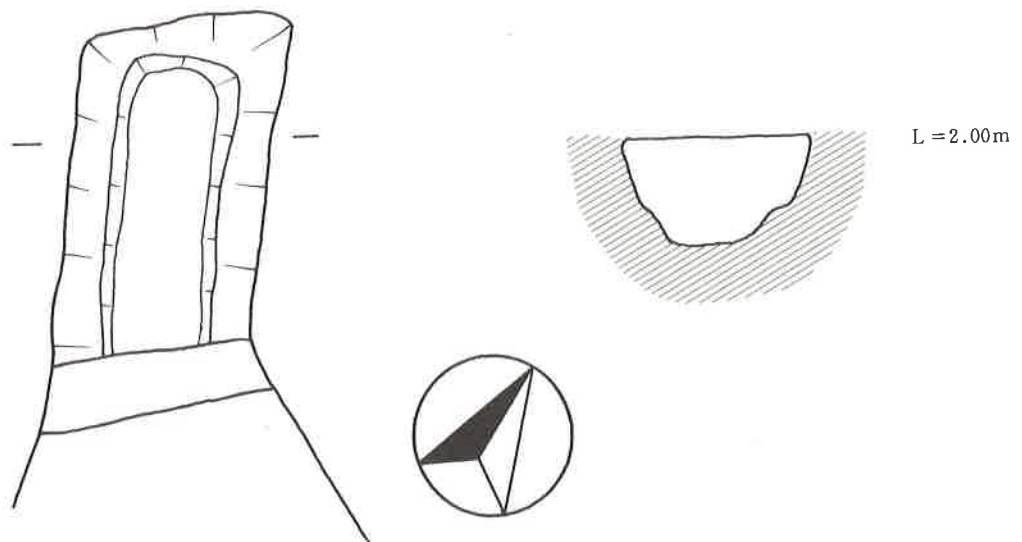


第7図 遺構(四)

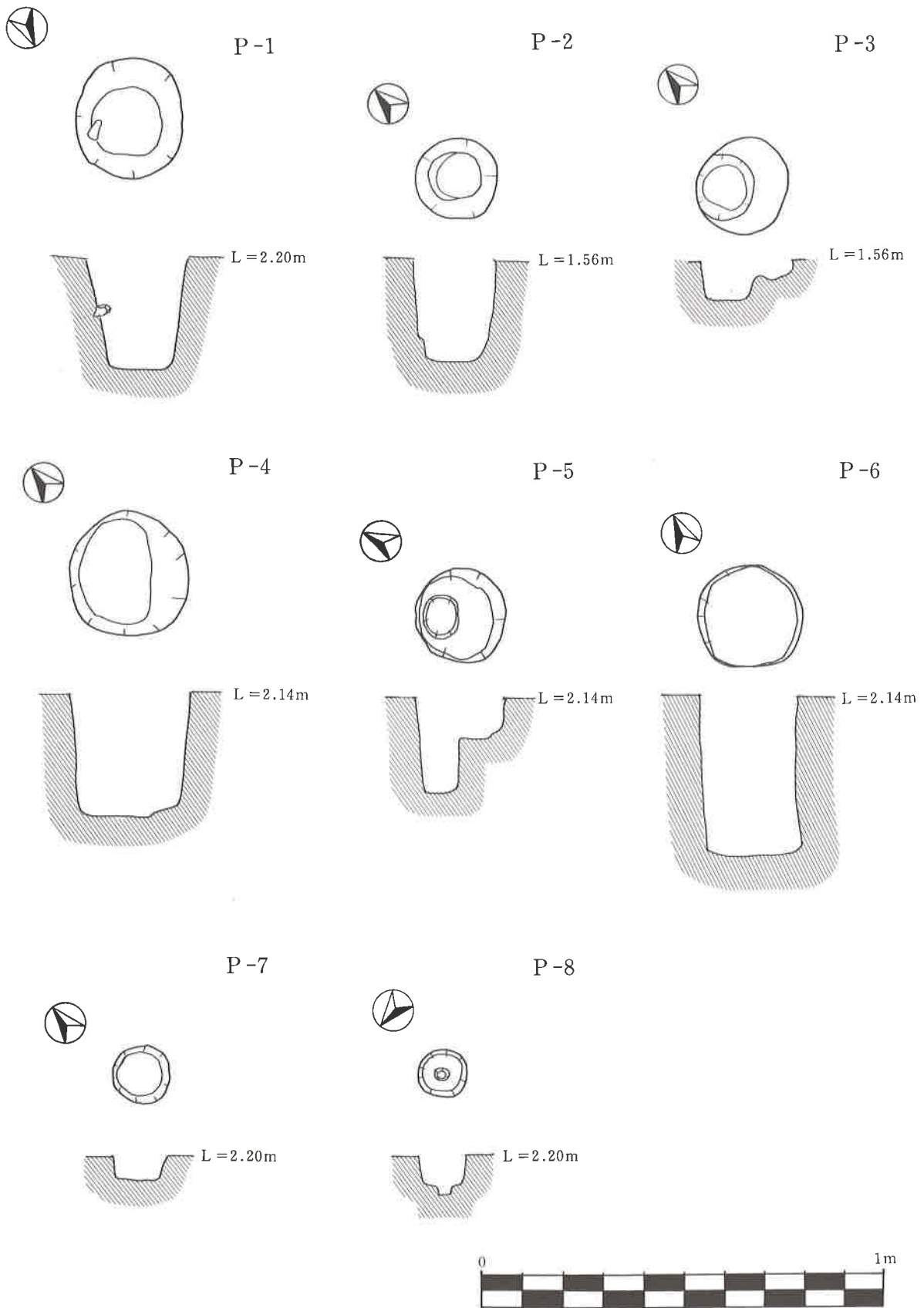
SD-1



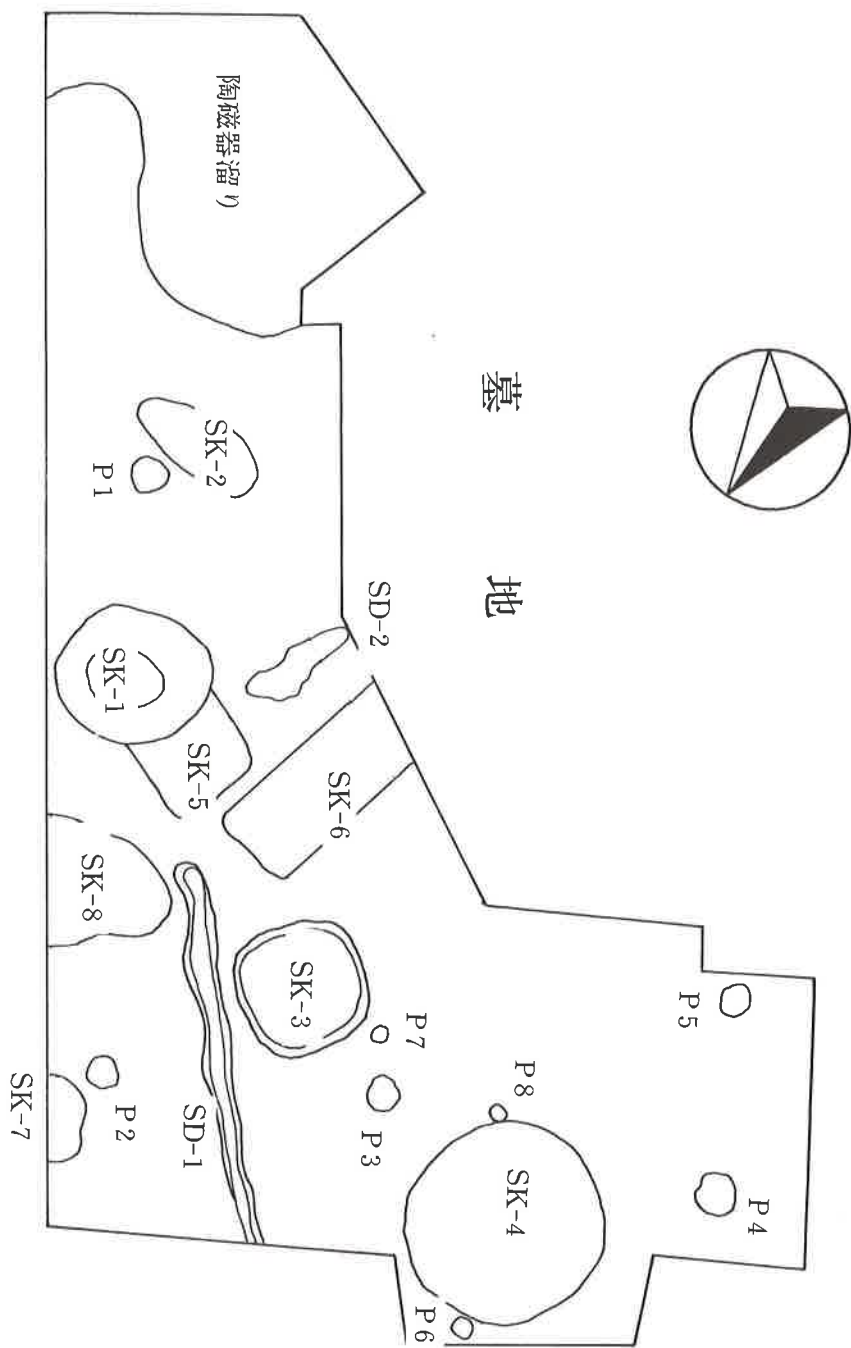
SD-2



第8図 遺構(五)



第9図 遺構 (六)



第10図 遺構配置図

## 第2節 陶磁器溜り出土の遺物

出口 浩

### はじめに

鹿児島県日置郡市来町字天神梅巖寺跡から出土した陶磁器片については、調査担当者の市来町教育委員会社会教育課主査 新町 正氏から種々説明を受けていたが、平成10年2月実際に役場の文化財室にて実見する機会を得た。この際、土嚢袋20袋ほどの中から、無作為に2袋分を抽出し、新町氏の許可を得て整理することになった。今回の報告分はこの2袋分の陶磁器片452点である。

### 1. 陶磁器の分類（表2）

総点数452点を数えた。中世と思われる青磁・白磁等7点が混入していたが、99%が近世の陶磁器片である。その中では薩摩焼が大半を占め、全体の67%、磁器は28%で薩摩焼の半分未満。全体では3分の1というところであった。締焼、赤焼、瓦器など全体の2%の割合である。

薩摩焼は甕・播鉢・浅鉢・茶家など日常雑器で、いわゆる黒ものがほとんどであり、白ものはわずが4点のみであった。白ものが非常に少ないことが注目される。黒ものは苗代川窯産と思われた。染付は伊万里焼が大半であるが、なかには平佐焼と思われるものも見られた。

### 2. 磁器の細分類（表3・第1～3図）

磁器126点をさらに細分した。染付が120点、白磁器が6点である。部位ごとに分類し、口縁部、底部はその特徴によって細分した。以下は図によって説明したい。

#### (1) 碗

胴部から口縁部にかけて直線的に外反するもの（1～5・10・14・15）と端反タイプのもの（9・20）がある。直線的な外反は角度が少ないもの（1・2）から、大きく開くもの（10・14・15）など様々なタイプが見られる。文様は櫻珞文（1）、草花文（3）、二重網目文（5）、コンニャク印花文（2）、山水文（14・15・20）などがある。また見込みにはコンニャク印版の五弁花文（10・13）、寿字文（6）、並草葉文（7）、海陽文（15）、栗ノ実文（12）などがある。見込み蛇の目剥ぎにアルミナサ塗布（13・9～11）もみられる。24は内面5窓に櫻珞文・紅葉文が蠟抜技法で、外面が宝文が描かれた端反の碗である。5窓はそれぞれ口縁部の突起で区画された洒落た作りである。

#### (2) 筒碗・小碗

雪持笹文の筒茶碗（16・17）、連子格子蝶文（18）と山水文（19）の小碗である。

#### (3) 皿

21は見込み荒磯文、外面山水文の呉須色の濃い小皿、22は見込み寿字文、高台内に草花文の描かれた小皿である。21に比べて22は呉須色が淡い。25は見込みにコンニャク印版の五弁花文、外面唐草文、高台内渦福字文の中皿である。23・26・29・30は輪花皿である。

23は内面山水文の陶胎磁器、26は内面菱形文、外面唐草文の小皿、29は内面菊花文の深皿、30は白釉磁器の深皿である。27～30はいづれも高台内中央部が凹形に窪む蛇ノ目形高台である。28は内面芙蓉手文が描かれている。



表2 梅巖寺出土陶磁器分類表

平成10年4月23日作成

	種 別	数量	計	特 徴	備 考	
磁 器	染付	120	126		口縁58、胴部16、底部34、完形12	
	無地	6				
薩 摩 焼	サツマ黒	293	305	雑器類	口縁52、胴部197、底部34、完形3、蓋4、耳3	
	サツマ褐	8		褐釉、灰釉、青灰釉など		
	サツマ白	4		小物		
その他陶器	締焼	1	5			
	瓦焼	3				
	火入具	1		瓦器製	足付	
移 入 品	三彩	4	7	竜門司系		
	赤焼	3		琉球系		
小 品	土人形	1	2	1点資料		
	円盤	1		1点資料		
磁 器	青磁	2	7		中世	
	白磁	1			中世	
	須恵器	1				中世
	土師器	3				
計		452	452			

表3 梅巖寺出土染付磁器系遺物分類表

平成10年4月23日作成


種類	破片種	器形	タイプ	数量	計	特 徴	備 考
染付	口 縁    底 部	碗	外 反	3	7	湯呑中碗	
			直 口	2			
			広 東	1			
			端 反	1			
		皿	高 台	1	4		
			碁 笥 底	1			
			輪 花	1			
			輪 花	1		陶胎	
	蓋	皿 形	1	2			
		角 形	1				
	口 縁			58	58	小片	器形不明
	胴 部			16	16	小片	器形不明
	底 部		蛇ノ目高台	1	33	2 段	
			無 釉 高 台	1			
陶 胎 高 台			1				
染 付 高 台			3	五弁花文 1			
見込蛇ノ目			3	五弁花文 1			
広 東 高 台			1				
不 明			23	小片		器形不明	
無地	口 縁    底 部	皿	皿	1	2		
			輪 花	1			蛇ノ目高台
	胴 部	碗	筒 形	1	4		中 碗
	口縁部		外 反	1			
	底 部		蛇ノ目高台	1		アルミナサ	
			蛇ノ目高台	1			
計			126	126			

表4 梅巖寺跡出土黒薩摩焼遺物分類表

平成10年4月22日作成

釉色	器種類	口縁型	形状	特徴	数量	計	時期	備考		
黒色系	甕	A	内L外張			2	23	前期		
		B	外L外反			0				
		C	外L字			4				
		D	外L内張			7				
		E	T字			1				
		F	逆7字			8				
		G	口唇		上下つまみ	1			前期	
		H	片口唇			0			前期	上縁 下縁あり
	摺鉢	A	外反凸帯			7	12	前期	貝目	
		B	外反L字			4				
		C	外L内張			0				
		D	L字			1				
	浅鉢	A	直外反		直立	3	6	前期	沈線	
		B	外反			0				
		C	外反内張			1				
		D	外L字			1				
		E	跳ね上げ			1				大鉢 刷毛目三彩
	茶屋	A	直立			2	13			
		B	肥高			2				
		C	蓋			4				
		D	注口			2				
		E	耳			3				
	壺	小壺			4	4				
その他				34	34		小片			
褐色系	碗				8	8				
計					100	100				

※黒サツマ300点の中から器種の明確なものを100点選んで分類した。

(4) 蓋他

天井部は雲波文が描かれている。33は青磁染付丸碗高台である。31は白釉磁器の餌入碗で、碁笥底上の底部を有している。

(5) 青花

34・35は陶胎染付である。34は見込みにコンニャク印版状の円文が描かれている。外は高台際の圏線1条を除いて不明。剥落気味の豊付部を除いて高台全面に釉が施されている。35は内面の文様は不明、豊付部から高台内は無釉である。?州窯系で明末。

(6) 青磁・白磁

36・39は青磁の高台部と小高坏である。36は高い高台、39は見込みに微礫片が付着している。いずれも陶胎である。37は白磁皿の高台部、見込みと高台部は無釉である。浅い削り出し高台となっている。

### 3. 薩摩焼の細分類 (表4図・第3～4図)

薩摩焼の中から白ものをのぞいた黒もの300点の中から機種の明確なもの100点を選んで、口縁部の形態を中心にして細分した。全体量は甕が23%と最も多く、以下茶家類・摺鉢・碗・浅鉢の順となっている。黒ものの碗類が少ないことが注目される。以下遺物の説明を若干記す。

(1) 甕

44は口縁部が内面にL字状にのび、外面にやや張り出す独特な口作りである。内L字外張形(甕A)とした。45は外面にL字状にのび、内面にも張り出しをもつもので外L内張形(甕D)とした。49はL字状の口縁凸帯の上下端を抓んで口唇状のアクセントをつけて仕上げるもので口唇形(甕G)とした。上下端の一端をもを抓むものを片口唇形(甕H)とした。いずれも口縁上面を水平にし、器形は深鉢状をなすものである。

(2) 摺鉢

47はL字状口縁をなし、器形は深めとなる。内面口縁までの櫛描の沈線文が施されている。L字形(摺鉢D)とした。52は柔らかく、外反する口縁部の外面に1～2条の小さな凸帯を廻らす物で、外反凸帯形(摺鉢A)とした。赤茶褐色の胎土を有している。苗代川焼であろう。

(3) 浅鉢

50は口縁部は外反し、内面は張り出しを有するもので、外反内張形(浅鉢C)とした。51はほぼ直口し、口唇部がやや外反するもので直外反(浅鉢A)および直立形とした。

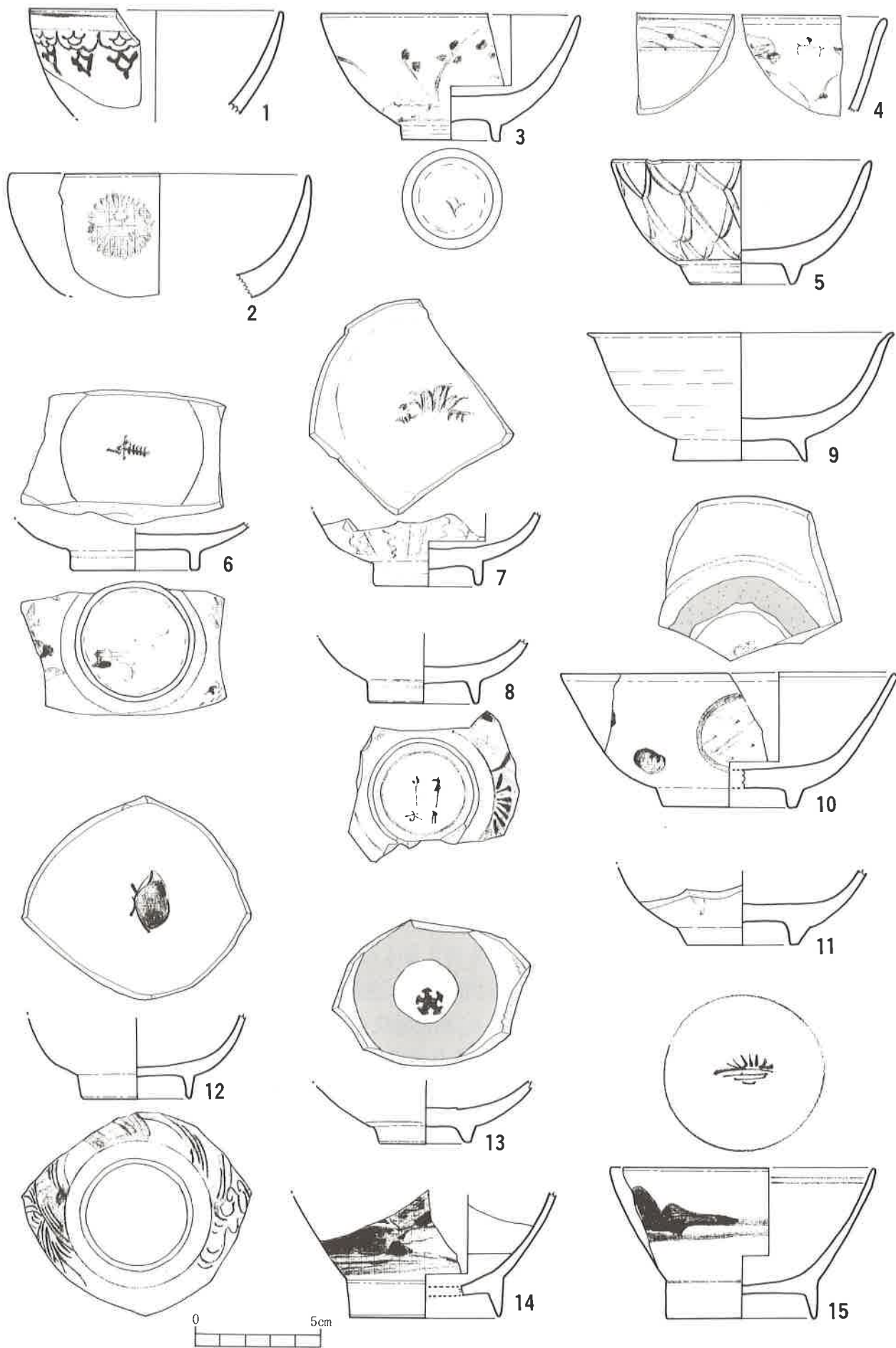
52は肩部に蝶形の突起が貼付されている。54は外反した口縁部の端部がさらに立ち上がる物で、跳ね上げ形(浅鉢E)とした。内面に白釉で波状の刷毛目が施されており、さらに三彩釉が重ねられている。

(4) 茶家

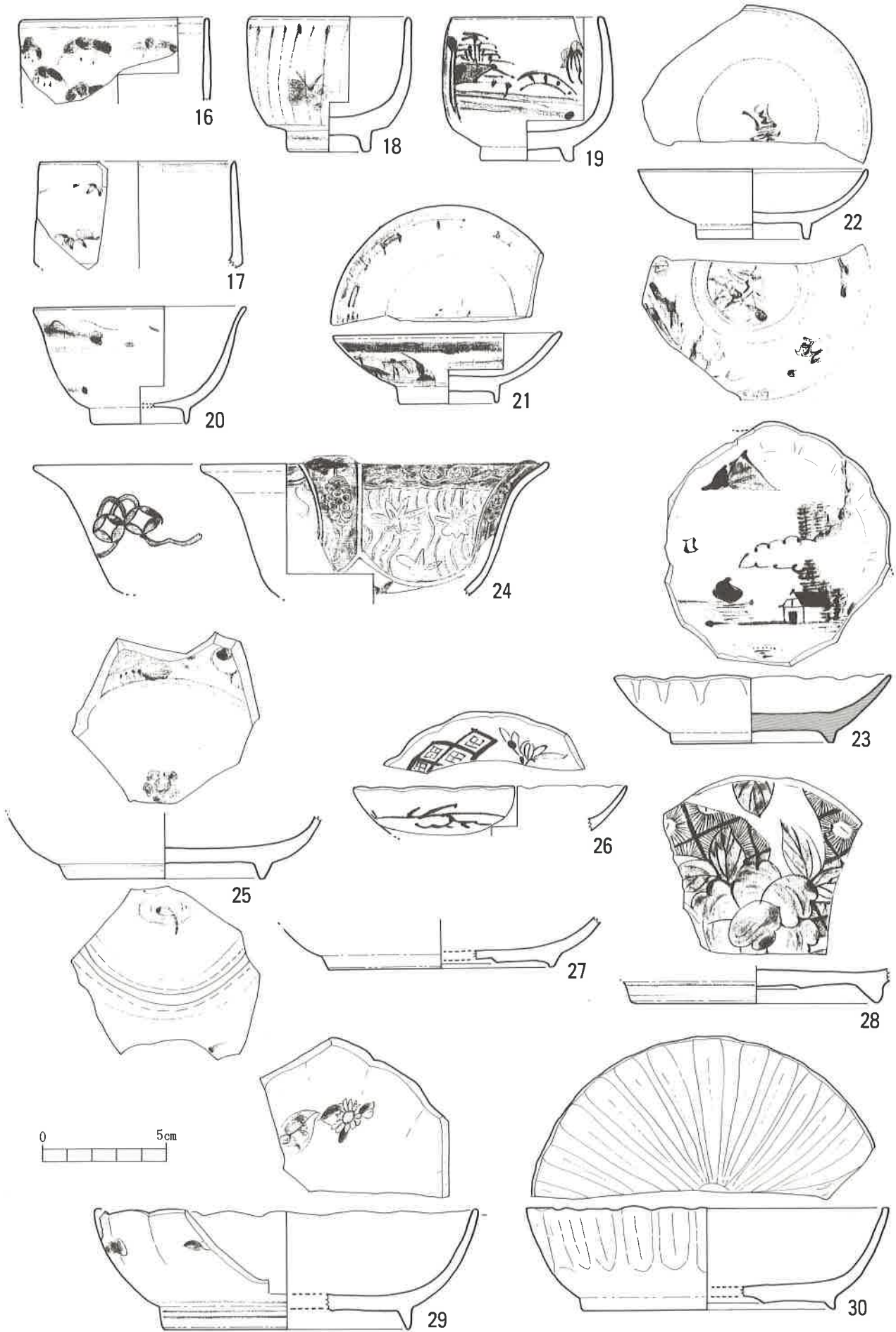
41・43の口縁部が小さく立ち上がるもの直立形(茶家A)と、42の口縁部を肥厚させたもの(茶家B)がある。43は薄手鉄釉である。

(5) 壺

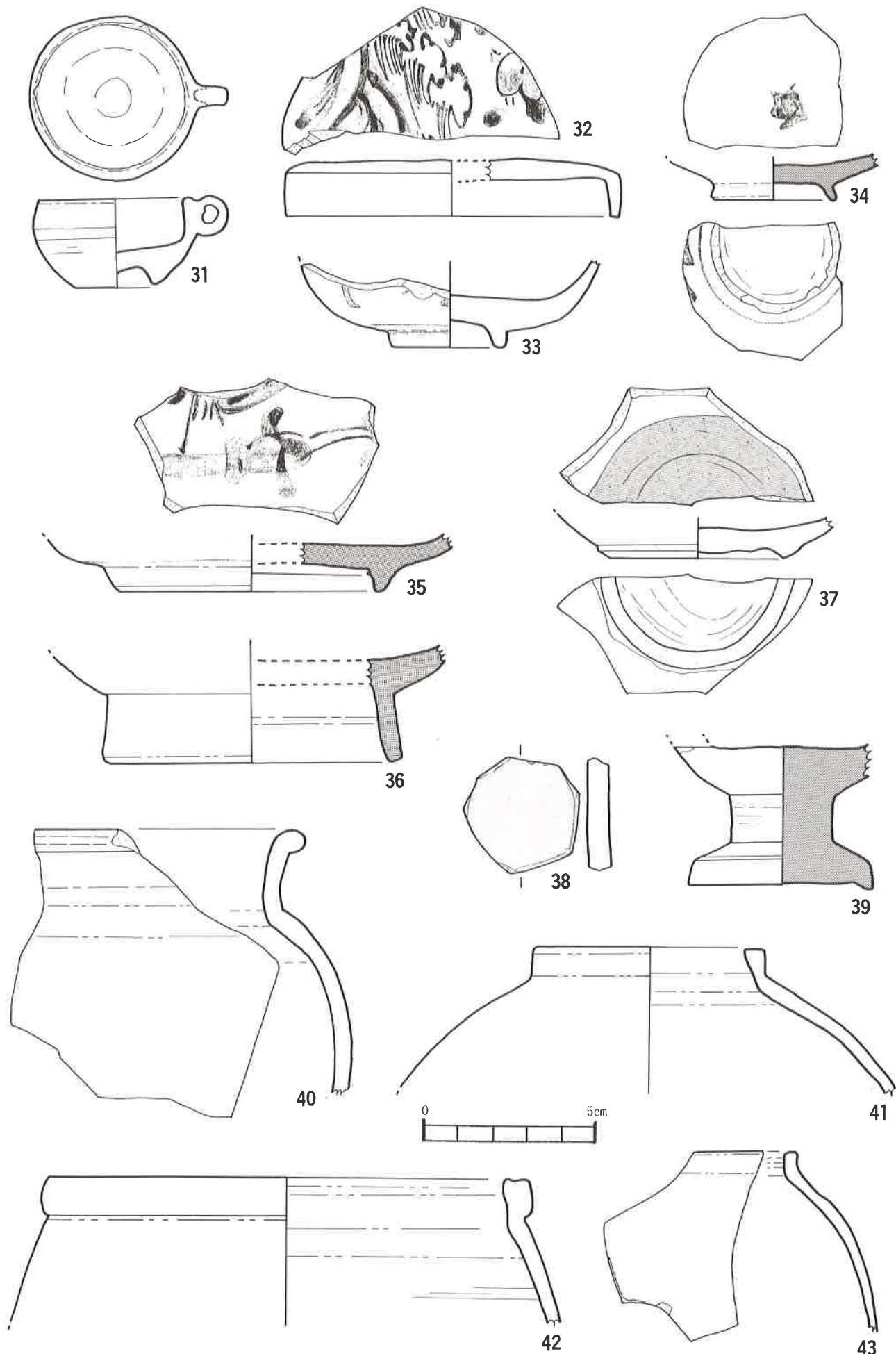
40は直立する頸部に小さく外反する丸い口唇部を付けた小形の壺である。



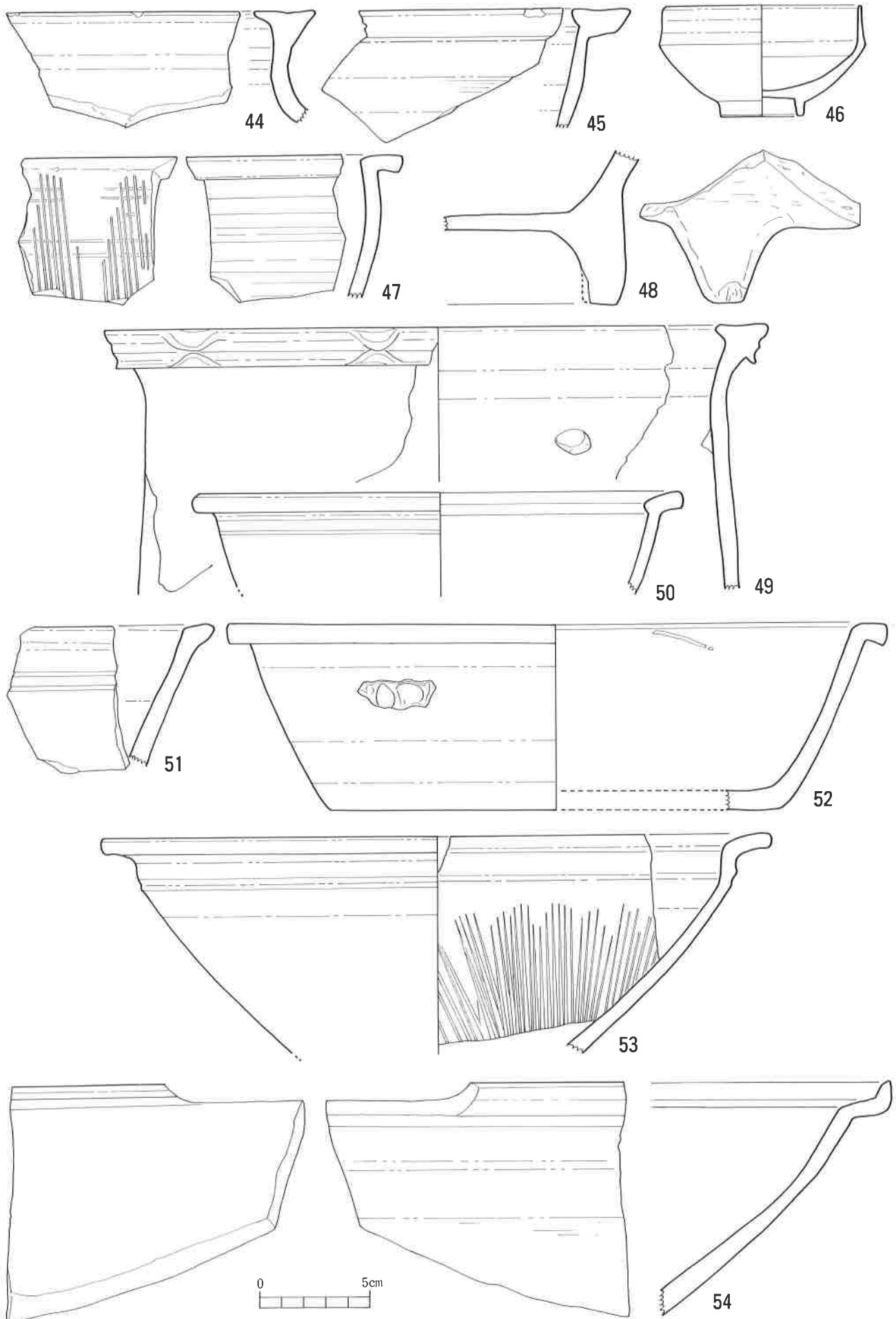
第11图 染付碗实测图



第12図 染付碗・皿実測図



第13图 染付碗・皿・薩摩茶家他実測図



第14図 薩摩甕・鉢・摺鉢実測図



(7) その他

38は直径3 cmの陶製円盤、46は白褐釉の胴締碗、高台部は無釉でシャープな作りである。48は瓦器で火入具の脚部である。

#### 4. 小結

梅巖寺跡出土の452点の陶磁器を分類し、染付磁器と黒薩摩を中心に観察を試みてきた。ここで、これらの遺物からみられる時代設定や全体の特徴について若干の考察を行ってみたい。

(1) 染付磁器について

碗・皿類は磁器設定の基準となるものが若干見られるので、その特徴をもとに考えてみたい。5の網目文は初期伊万里に盛んに用いられている。18世紀にやや減少し、19世紀に大皿や盃洗に多く見られる。13・9～11の見込み蛇ノ目割ぎは17世紀後半から18世紀の唐津・伊万里焼の小皿類の窯詰め法として多用されたものである。また、13・25のコンニャク印版の五弁花文は18世紀前半を中心に流行した装飾法、27～30の蛇ノ目凹型高台は18世紀以降の深皿、鉢に多い。14・15の高い高台に直行外反の口縁部は広東碗で18世紀末からみられるものである。これらのことから染付磁器の年代は18世紀から19世紀を中心とするものと考えてよいであろう。4・12・21・22は平佐焼等在地の染付の可能性もあることも指摘しておきたい。

また、35の？州窯製や37の白磁、39の青磁など明末のものもみられる。市来が貿易港として繁栄した時代のものであろう。

(2) 黒薩摩について

日常生活結用具である黒ものについては、口縁部断面の形態等から表Ⅲの如く分類した。甕については貝目痕から、内L外張（甕A）、口唇（甕G）、片口唇（甕H）タイプを前期と比定した。しかし近年貝目痕の使用年代が18世紀まで下る事例が増加しており、再検討の余地が見られる。T字（甕E）と逆7字（甕F）タイプは内Lや口唇タイプにつながる物で、外L外反（甕B）、外L字（甕C）、外L内張（甕D）タイプ等より古期のものと推定している。

摺鉢は外反凹帯（摺鉢A）・外反L字（摺鉢B）・外L内張（摺鉢C）・L字（摺鉢D）タイプに分類した。摺鉢Aタイプは53で渡辺編年による仮称3型式（以下3式）にあたるもので18世紀に比定されている。摺鉢の中では数量が最も高い。ここでは貝目痕を有するものが多く、前期としておきたい。摺鉢Bタイプは、L字状に口縁部が屈折するが、内面が丸味を帯びるので、摺鉢Dタイプと異なっている。摺鉢Aタイプに次いで多く出土している。摺鉢Cタイプは渡辺編年の5式にあたっている。最も古く17世紀代に否定されている。今回の遺物の中には見られなかった。47が摺鉢Dタイプである。渡辺編年の4式にあたり18世紀に否定されている。

浅鉢は直外反（浅鉢A）・外反（浅鉢B）・外反内張（浅鉢C）・外L字（浅鉢D）・跳ね上げ（浅鉢E）タイプの5つに分類した。51が浅鉢Aタイプである。貝目痕の付くものが多く、甕のA・F～Hタイプ、摺鉢Aタイプとセット関係を有するものと思われる。54は、浅鉢Eタイプで、大鉢の刷毛目三彩である。竜門司系としてこの中に入れたが、外面の胴部の無施釉の特徴から肥前陶器としてとらえた方がいいかもしれない。

以上甕、摺鉢、浅鉢を中心として口縁部の形態分類から、渡辺編年の摺鉢を参考にして新旧および時期の設定を試みた。渡辺編年を基本にするとやはり時期は18世紀以降とならざるを得ない。染付磁器の相関も対応しているように考えられる。しかしながら貝目痕の問題や、前期

黒ものの明確でない現状から、甕A・F～Gタイプ、摺鉢Aタイプ、浅鉢Aタイプなど、古くから使われていた可能性も強く、あえて前期からと時期を設定したものである。

## おわりに

市来町は我がふるさとである。梅巖寺跡附近は少年時代の遊び場であった。父や母から市来港のかつての繁栄ぶりをよく聞かされていたが、遠く中世のころから中国との貿易港として開かれていたらしい。土橋集落にある「トジンマツ」も「唐人町」が語源のようである。

今回、梅巖寺跡の陶磁器片の整理をする機会を得て、我が祖先が実際に使った茶碗皿に当たることができた。他の遺跡の出土品とはまた異なるふるさとへの感動みたいな感情にひたることができた。

整理の機会を与えていただいた江口英雄教育長、宇都隆雄社会教育課長、新町正主査に末筆ながら衷心より感謝の意を表したいと思います。なお、陶磁器については渡辺芳郎先生、橋口亘氏の指導を受けました。合わせて感謝の意を表します。

## 参考引用文献

- (1) 「北海道から沖縄まで 国内出土の肥前陶磁」佐賀県立九州陶磁文化館 昭和59年
- (2) 「からから」No.6 鹿児島陶磁器研究会 平成12年3月4日
- (4) 渡辺芳郎「近世薩摩焼摺鉢考」鹿児島考古第34号 鹿児島県考古学会 平成12年7月

梅厳寺出土遺物観察表(1)

番号	番 号	実測 番号	種別	器種	部位	器形	口縁部	見込み	高台	文		色		調	釉	胎土	備考
										内面	外面	内面	外面				
1	18	18	染付	碗	口縁～胴部	丸碗						灰白色2.5GY8 1	同色	透明	白灰	粗貫入	
2	17	17	染付	碗	口縁～胴部	丸碗					コンニャク印花文	明オリーブ灰色 2.5GY7/1	同色	透明	白		
3	38	38	染付	碗	口縁～底部	丸碗					無文	明オリーブ灰色 2.5GY8/1	同色	透明	白灰	高台内松葉状文	
4	36	36	染付	碗	口縁～胴部						交叉草文	灰白色N7/0	同色	透明	白	帯文	
5	37	37	染付	碗	口縁～胴部	丸碗			内高台		無文	灰白色10Y7/1	同色	透明	白灰	32と被合	
6	31	31	染付	碗	底部			寿くずし字			草花文	明オリーブ灰色 2.5GY7/1	同色	透明	白灰	高台内花文	
7	47	47	染付	碗	胴部～底部	丸碗		草葉文			並草葉文	明緑灰色7.5GY 8/1	同色	透明	白		
8	49	49	染付	碗	底部			ゴマ目			成化年製	明緑灰色7.5GY 8/1	同色	透明	白		
9	43	43	白釉磁器	碗	口縁～底部		端反	蛇ノ目剥、アルミノ サ			無文	灰白色N8/0	同色	白	白		
10	40	40	染付	碗	口縁～底部	外反		蛇ノ目剥、アルミノ サ、コンニャク印 サ	内高台		丸文	明オリーブ灰色 2.5GY7/1	同色	透明	白灰	*	
11	52	52	染付	碗	胴部～底部			蛇ノ目剥、アルミノ サ	内高台		無文	灰白色N8/0	同色	白	白		
12	44	44	染付	碗	胴部～底部	丸碗		栗文?			振じり文	明緑灰色7.5GY 8/1	同色	透明	白		
13	29	29	染付	碗	底部			蛇ノ目剥、コンニャ ク五弁花	内高台			明オリーブ灰色5 GY7/1	同色	透明	白灰	厚手	
14	30	30	染付	碗	胴部～底部	広東			高高台		山水文	明緑灰色7.5GY 8/1	同色	透明	白	薄手	
15	34	34	染付	碗	口縁～底部	広東		荒磯文			山水文、海陽文	明緑灰色10GY8 1	明オリーブ灰色5 GY7/1	透明	白	夕陽	
16	16	16	染付	筒茶碗	口縁～胴部						雪持笹文	明緑灰色7.5GY 8/1	同色	透明	白		
17	15	15	染付	筒茶碗	口縁～胴部						雪持笹文	灰白色N8/0	同色	白	白灰		
18	20	20	染付	小碗	口縁～底部	丸筒碗					蓮子格子蝶文	明オリーブ灰色 2.5GY7/1	同色	透明	白		
19	19	19	染付	小碗	口縁～底部	丸筒碗					山水文	明緑灰色7.5GY 8/1	同色	透明	白		
20	35	35	染付	碗	口縁～底部		端反	白			山水文	明緑灰色7.5GY 8/1	同色	透明	白		
21	33	33	染付	皿	口縁～底部			荒磯文			雷帯文	明緑灰色10GY8 1	同色	透明	白	鳥	
22	27	27	染付	小皿	口縁～底部			雨風くずし 寿字文			草花文	灰白色10GY7/ 1	同色	透明	白		
23	23	23	染付	輪花皿	口縁～底部				広浅		無文	灰白色2.5GY8 1	同色	白	陶胎		
24	39	39	染付	碗	口縁～底部		端反凸部				宝文	明緑灰色7.5GY 8/1	同色	透明	白	紅葉、環珞文、宝 文	
25	28	28	染付	中皿	底部			コンニャク五弁花	渦福字文		不明	灰白色10GY7/ 1	同色	透明	白灰色		
26	21	21	染付	輪花小皿	口縁～胴部						菱形文	灰白色7.5GY8 1	同色	白	白灰		
27	50	50	白釉磁器	皿	底部				蛇ノ目二段高台			明緑灰色7.5GY 8/1	同色	透明	白		

梅厳寺出土遺物観察表(2)

番号	番報告書	測定番号	種別	器種	部位	器形	口縁部	見込み	高台	文		様		色		調	釉	胎土	備考
										内面	外面	内面	外面	内面	外面				
2	28	45	染付	皿	底部				蛇ノ目二段高台	芙蓉手?			灰白色5Y8/1	灰白色5Y8/1	白	白			
	29	22	染付	輪花深皿	口縁~底部		菊花文		蛇ノ目二段高台	菊花文			明緑灰色7.5GY8/1	同色	透明	白			
3	30	41	白釉磁器	輪花深皿	口縁~底部				蛇ノ目二段高台				灰白色5GY8/1	同色	透明	白			
	31	51	白釉磁器	餌入碗	完形				際露胎	無文	無文		明緑灰色10GY8/1	同色	透明	白			
4	32	46	染付	蓋	口縁部	角蓋				無文	雲波文		明緑灰色7.5GY8/1	同色	透明	白			
	33	54	青磁染付	碗	胴部~底部	丸碗		無文		無文	不明		明オリーブ灰色2.5GY7/1	同色	青	白灰			
5	34	42	青花	小皿	底部		コニヤク印状・円文	小形			不明		灰白色10Y7/1	灰白色10YR8/1	透明	陶胎	中国		
	35	48	青花	小皿	底部			無軸					灰白色10Y8/1	同色	透明	陶胎	明末、漳州窯系		
6	36	53	青磁大碗	高台	底部			広裏形					オリーブ黄色5Y6/3	同色	茶褐	陶胎			
	37	56	白磁	皿	底部		蛇ノ目割	削り出					灰白色7.5Y8/1	同色	白	茶褐	中国		
7	38	5	サツマ黒	円板	胴部	高杯	正円						黒褐色10YR3/1	同色	黒	黒褐			
	39	55	青磁	仏飯器	胴部~底部			袖切					灰オリーブ色7.5GY6/2	灰黄色2.5Y7/2	青緑	陶胎	中国		
8	40	4	サツマ黒	壺	口縁~胴部		丸口縁						黒褐色2.5Y3/1	赤灰色2.5YR4/1	黒	茶褐	外横刷毛目		
	41	10	サツマ黒	茶家	口縁~胴部		直口縁						オリーブ黒色5Y3/2	オリーブ黒色7.5Y3/2	黒	黒			
9	42	8	サツマ黒	茶家	口縁~胴部		肥厚口縁						明赤褐色2.5YR5/6	黒褐色2.5Y3/2	黒	茶褐			
	43	3	サツマ黒	茶家	口縁~胴部		直口縁						オリーブ黒色7.5Y3/1	暗赤褐色7.5YR3/2	鉄	黒灰			
10	44	9	サツマ黒	甃	口縁部		内L外張						灰オリーブ色7.5Y5/2	灰オリーブ黒色5Y3/1	黒	赤茶			
	45	2	サツマ黒	甃	口縁部		内L外張						灰色N4/0	黒褐色2.5Y3/1	黒	黒灰			
11	46	6	サツマ褐	碗	口縁~底部			シャープ、無軸					にぶい黄色2.5Y6/4	にぶい黄色2.5Y6/3	白褐	白褐	胴締めタイプ		
	47	14	サツマ黒	摺鉢	口縁~胴部		逆L字						灰褐色5YR5/2	明オリーブ褐色2.5Y3/3	黒茶	赤茶			
12	48	13	瓦器	火入具	足部						ナデ調整		灰白色2.5Y8/2	同色	無	白褐			
	49	24	サツマ黒	甃	口縁~胴体		口唇形						オリーブ褐色2.5Y4/3	灰オリーブ色7.5Y4/2	黒	茶褐	胎土粗		
13	50	1	サツマ黒	浅鉢	口縁部		外L内張						赤黒色2.5YR2/1	同色	黒	茶灰			
	51	11	サツマ黒	浅鉢	口縁~胴体部		直外反				沈線2本		黒褐色10YR3/2	同色	黒	赤褐			
14	52	7	サツマ黒	浅鉢	口縁~底部		外L				リボン付		暗褐色10YR3/4	黒褐色2.5Y3/2	褐	赤灰			
	53	25	サツマ黒	摺鉢	口縁~胴部		外反凸帯形						黒褐色2.5Y3/2	黒褐色10YR3/2	黒	赤茶	4本脚目、胎土赤		
15	54	26	サツマ黒	大鉢	口縁~胴部		跳ね上げ						にぶい赤褐色(生地)2.5YR4/3	同色	褐	赤茶			



# 圖 版





1 トレンチ近景



1 トレンチ遠景

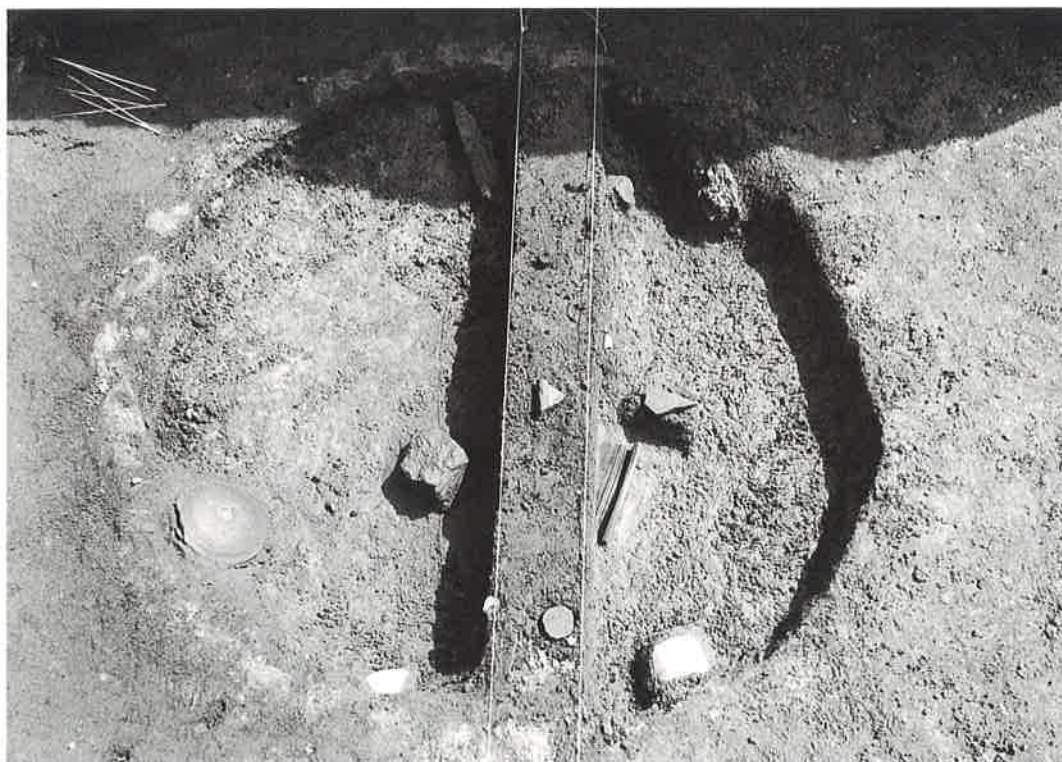




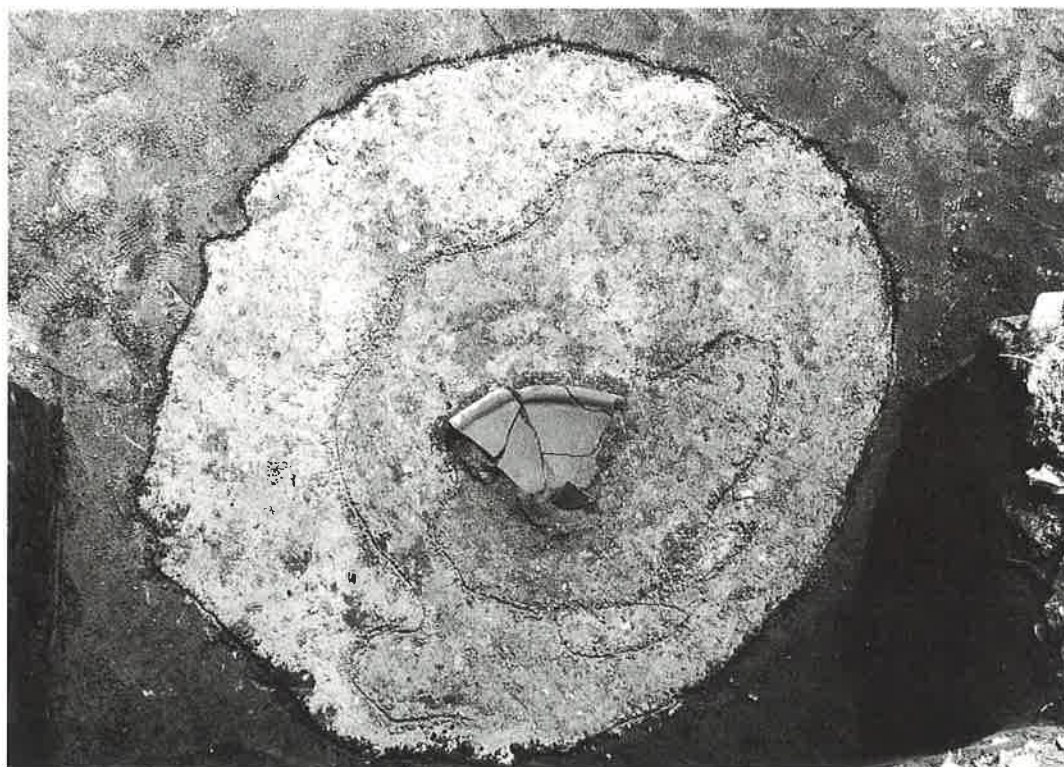
SK-1



SK-2 と PIT



SK-3



SK-4



SK-5



陶磁器溜まり



遺構検出状況



遺構完掘状況



# 戸崎原遺跡



# 第1章 戸崎原遺跡確認調査の経過

## 第1節 調査に至るまでの経過

市来町教育委員会では、文化財の保存活用を図るため、各開発機関との事業実施区内の文化財の有無及びその取り扱いについて事前に協議し、開発との調整を図っている。平成5年度に町建設課から戸崎地区漁業集落環境整備事業区内の埋蔵文化財の有無について照会が為された。市来町教育委員会は、同地区に周知の遺跡「戸崎原遺跡」が存在することを市来町建設課に通知し、その後の協議の結果、平成6年度に確認調査を実施することになった。

## 第2節 報告書作成の組織

調査主体者	市来町教育委員会		
調査責任者	〃	教 育 長	江 口 英 雄
調査庶務	〃	社会教育課長	宇 都 隆 雄
	〃	社会教育係長兼文化振興係長	
	〃	(1月より) 逆 瀬 川 正	
	〃	派遣社会教育主事	濱 田 智 男
	〃	主 任	芹ヶ野 幸 淑
報告書担当者	〃	主 査	新 町 正
	〃	主 事	西 村 健 一

## 第3節 調査の組織（当時）

調査主体者	市来町教育委員会		
調査責任者	〃	教 育 長	松 崎 孝
調査庶務	〃	社会教育課長	橋 口 正 己
	〃	派遣社会教育主事	
	〃	兼社会教育係長	木 原 健一郎
	〃	主 事 補	奥之園 勝
調査担当者	〃	主 事	新 町 正
調査指導	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文 化 財 主 事	宮 田 栄 二

## 第4節 調査の経過

調査は平成6年10月3日（月）から10月17日（月）まで実施された。調査の経過は日誌抄をもつてかえることにする。

10月3日（月）作業に入る前に無事安全祈願を行なう。午前中、小型バックホーにより1～7トレンチを設定し、表土除去を行なった。1トレンチ・2トレンチの掘り下げ。2トレンチより柱穴検出。午後より8から11トレンチを設定し、小型バックホーにより表土除去を行なった。1トレンチは地山を検出し、掘り下げ終了。3・4・6・9トレンチはすぐにシラス面を検出し、終了。小型バックホーにより3・9トレンチを埋め戻す。





第1図 周辺遺跡分布図

- 10月4日（火）午前中2トレンチ・10トレンチを掘り下げる。10トレンチの暗茶褐色粘質土層下部より黒曜石コア（1）、剥片（2）出土。2トレンチは掘建柱建物跡を検出、50分の1で遺構配置図作成。午後より2トレンチは柱穴掘り下げ。10トレンチは暗茶褐色粘質土層から淡茶褐色粘質土層を掘り下げ。礫検出。
- 10月5日（水）午前中2トレンチ・10トレンチを掘り下げる。2トレンチは淡茶褐色粘質土層掘り下げ。礫が3点出土。10トレンチは黄褐色粘質土層に淡茶褐色粘質土層が落ち込んでいる部分の検出。遺構である可能性が高く、シートを被せ保存する。午後より、11トレンチの掘り下げを行なう。黒色粘質土層より、土器片・礫出土。引き続き掘り下げにはいる。
- 10月6日（木）2トレンチ・11トレンチを掘り下げる。2トレンチは淡茶褐色粘質土層掘り下げ。礫が数点出土。11トレンチは暗茶褐色粘質土層より、黒曜石片出土。8トレンチを掘り下げたが、地山を検出したため終了。埋め戻し。11トレンチを埋め戻す。
- 10月7日（金）午前中、2トレンチ・11トレンチを掘り下げる。2トレンチは暗茶褐色粘質土層掘り下げ。11トレンチは暗茶褐色粘質土層掘り下げ。2・11とも黒曜石片出土。午後より、11トレンチから淡茶褐色粘質土層より、黒曜石片出土。10・11トレンチを50分の1で実測を行なう。
- 10月10日（月）体育の日で休み。
- 10月11日（火）午前中、2トレンチ・11トレンチを掘り下げる。2トレンチは、淡茶褐色粘質土層を掘り下げる。11トレンチは黄褐色粘質土層より礫群検出。また、午後より10トレンチの遺構と思われる落ち込みを15cmのセクションベルトを残し、掘り下げる。それにより、礫が検出され、掘り込みを伴う礫群であることが判明する。すぐに現場指導を県立埋蔵文化財センターに要請する。
- 10月12日（水）午前中、県立埋蔵文化財センター文化財主事の宮田栄二氏に現場指導を頂く。午後より10・11トレンチの平板実測を行なう。5・7・8トレンチを掘り下げたが、すぐにシラスを検出し、終了。
- 10月13日（木）午前中、10トレンチの掘り込みのある礫群の平板実測を行なう。2・11トレンチの精査。11トレンチに2基目の礫群検出。また柱穴も検出。午後より、11トレンチの土層断面図作成。
- 10月14日（金）午前中、10トレンチにテストトレンチ設定、掘り下げる。5トレンチの埋め戻し。午後より、10トレンチの土層断面図作成。6・7トレンチの埋め戻し。
- 10月17日（月）午前中、2トレンチの平板実測図作成。4・11トレンチの埋め戻し。午後より2・10トレンチの埋め戻し。発掘道具を清掃し、作業終了。

## 第2章 遺跡の位置及び環境

### 第1節 遺跡の位置及び環境

市来町は日置郡の最北端に位置し、北は串木野市と境を接し、南から東には東市来町と接している。東側は山地が多く、西側には吹上浜が広がっている。西側に流れる八房川下流域と南西に流れる大里川下流域には平野が広がっている。この平野部に接するように山間部から出た小台地があり、この台地には各時代の遺跡が存在している。戸崎原遺跡は市来町大字大里字戸崎原に所在し、市来町に広がる吹上浜の白浜が唯一途切れ、岩場が海岸に広がっている。この岩場を見下ろす形で海岸線沿いに小台地が形成され、遺跡はこの台地につくられている。また遺跡周辺部には丸塚山と呼称される山が存在し、江戸時代には山裾が参勤交代の道として、太平洋戦争の頃には付近に砲台が作られた。

表1 周辺の遺跡

	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物
1	田中掘	大里田中掘ほか	段丘	縄文・弥生・古墳・中世・近世	土器・土師器・陶器
2	崎野掘	大里崎野掘ほか	丘陵	弥生・古墳・中世・近世	土器・土師器・白磁・陶器
3	深田前迫	大里深田前迫ほか	丘陵	古墳・中世・近世	土器・土師器・陶器・土錘
4	戸崎平	大里戸崎平ほか	丘陵	中世	土師器・土錘
5	戸崎原	大里戸崎原ほか	段丘	古墳・中世・近世	土器・土師器・陶器・土錘





第2図 トレンチ配置図

## 第3章 発掘調査の概要

### 第1節 確認調査

遺跡の確認が約40,000平方メートルあり、効率化を図るため、地表面観察により所によっては小型バックホーにより掘り下げを行なった。トレンチは合計11ヶ所設定した。トレンチの長さは以下の通りである。

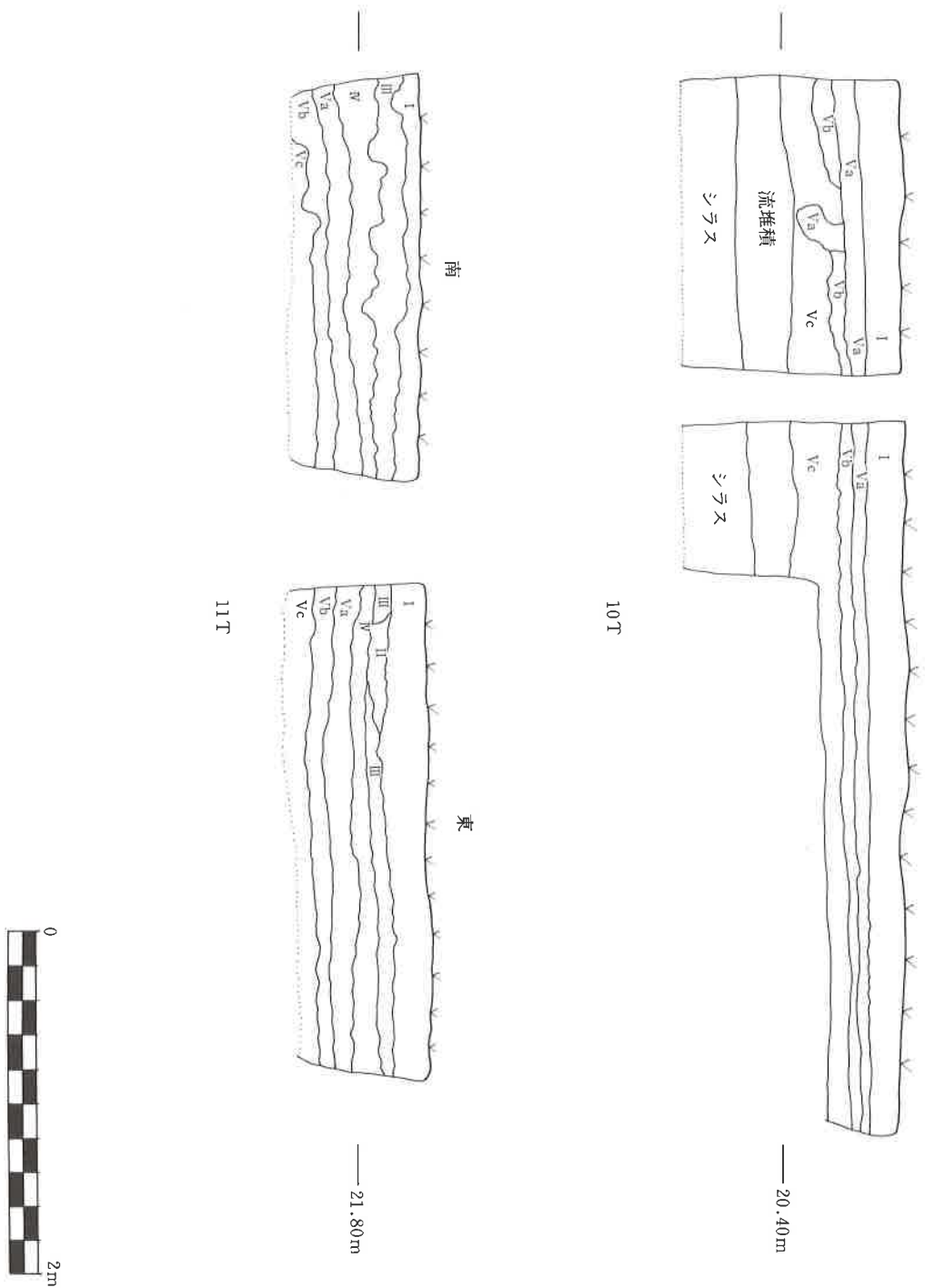
1 トレンチ	4 m×2 m	2 トレンチ	4 m×2 m	3 トレンチ	4 m×2 m
4 トレンチ	4 m×2 m	5 トレンチ	4 m×2 m	6 トレンチ	4 m×2 m
7 トレンチ	4 m×2 m	8 トレンチ	4 m×2 m	9 トレンチ	4 m×2 m
10 トレンチ	4 m×1.5m	11 トレンチ	3 m×2.5m		

### 第2節 標準土層

確認調査で土層が確認できたのが第1 トレンチで、その他の場所は墓穴を掘るために攪乱されていて確認できなかった。

#### 標準土層





第3図 トレンチ土層断面図

### 第3節 各トレンチの概要

#### 1. 各トレンチの概要

各トレンチの概要は以下の通りである。

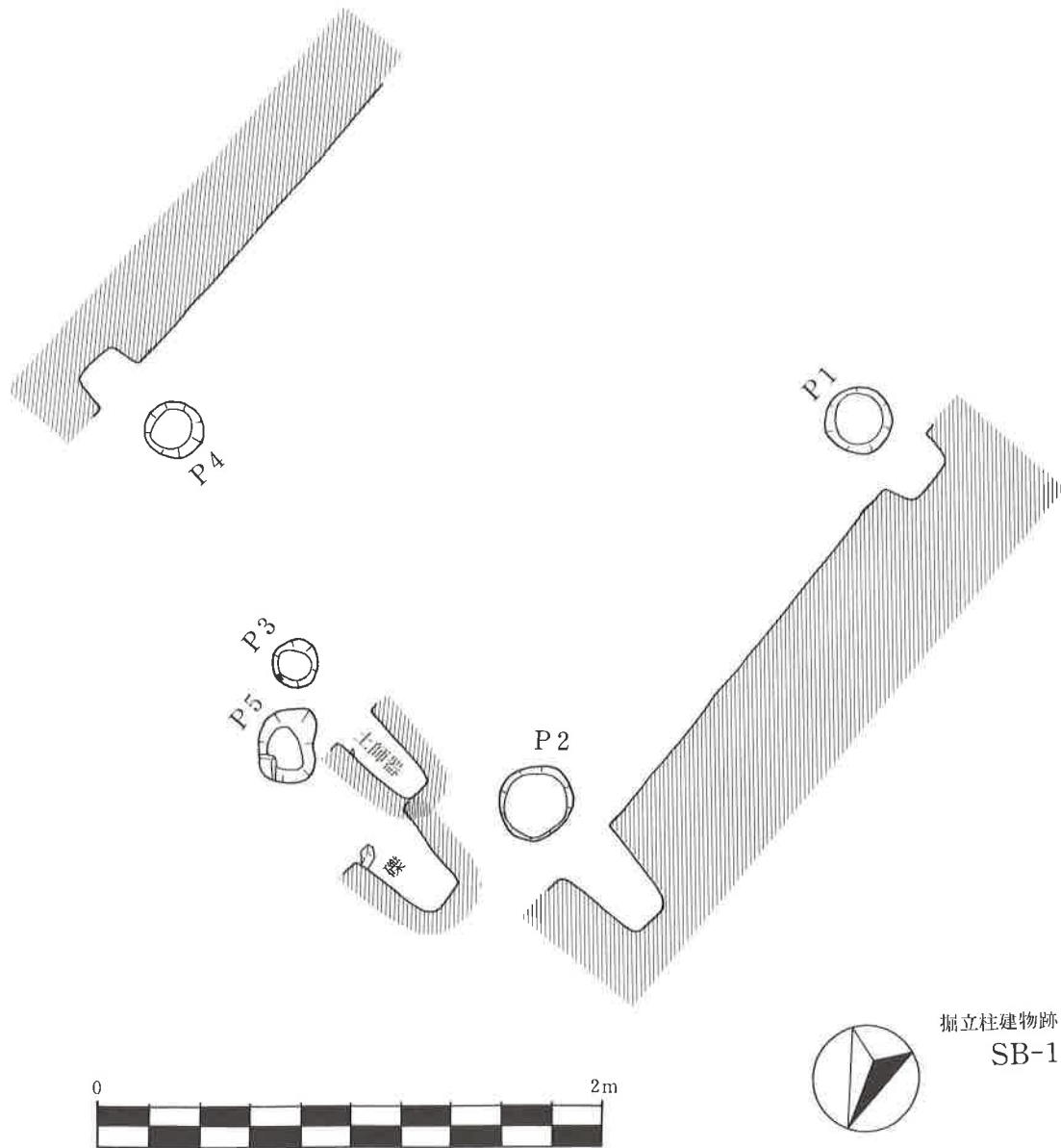
- 第1トレンチ I層耕作土。II層以下は削平を受け、小礫を含む黄茶褐色砂質土層をI層直下で検出。遺物、遺構などは検出されなかった。
- 第2トレンチ I層耕作土。II層は黒色有機土層。III層は淡黄褐色土層。II層とIII層の間で柱穴検出。礫出土。IV層の黒褐色土層は発達が悪く、見当たらない。Vaは通称チョコ層と呼ばれる層で、黒曜石フレイク7点と礫1点出土している。Vb層は淡茶褐色粘質土層で、下部より3点の黒曜石フレイク及びコア1点出土している。
- 第3トレンチ I層腐植土。II層以下削平を受け、消滅。すぐにシラスを検出。
- 第4トレンチ I層腐植土。II層以下削平を受け、消滅。すぐにシラスを検出。
- 第5トレンチ I層腐植土。II層以下削平を受け、消滅。すぐにシラスを検出。
- 第6トレンチ I層腐植土。II層以下削平を受け、消滅。すぐにシラスを検出。
- 第7トレンチ I層腐植土。II層以下削平を受け、消滅。すぐにシラスを検出。付近には土師器・成川式土器・土錘などが表面採集できる。
- 第8トレンチ I層腐植土。II層以下削平を受け、消滅。すぐにシラスを検出。現在、畑へのあぜ道となっている。
- 第9トレンチ I層腐植土。II層以下削平を受け、消滅。すぐにシラスを検出。
- 第10トレンチ I層耕作土。II層からIV層まで削平を受けているが、V層以下は残存している。VaからVb層にかけて黒曜石フレイク
- 第11トレンチ I層耕作土。II層は黒色有機土層。II層上面で溝検出。成川式土器片出土。III層は淡黄褐色土層。IV層の黒褐色土層は発達が悪く、見当たらない。Va～cは通称チョコ層と呼ばれる層で、黒曜石フレイクや石集遺構が出土している。

### 第4節 トレンチ出土遺物・遺構

戸崎原遺跡に11ヶ所のトレンチを設定し、遺物や遺構が確認されたのは2トレンチ、10トレンチ、11トレンチの3ヶ所である。遺物の石材は黒曜石、頁岩、砂岩、凝灰岩、チャート、鉄石英など多種あり、特に黒曜石は肉眼的観察により黒色で良質の樋脇町上牛鼻産と思われるもの、これを黒曜石Aと分類し、透明でガラス質が強く良質な黒曜石を黒曜石Bとして分類した。

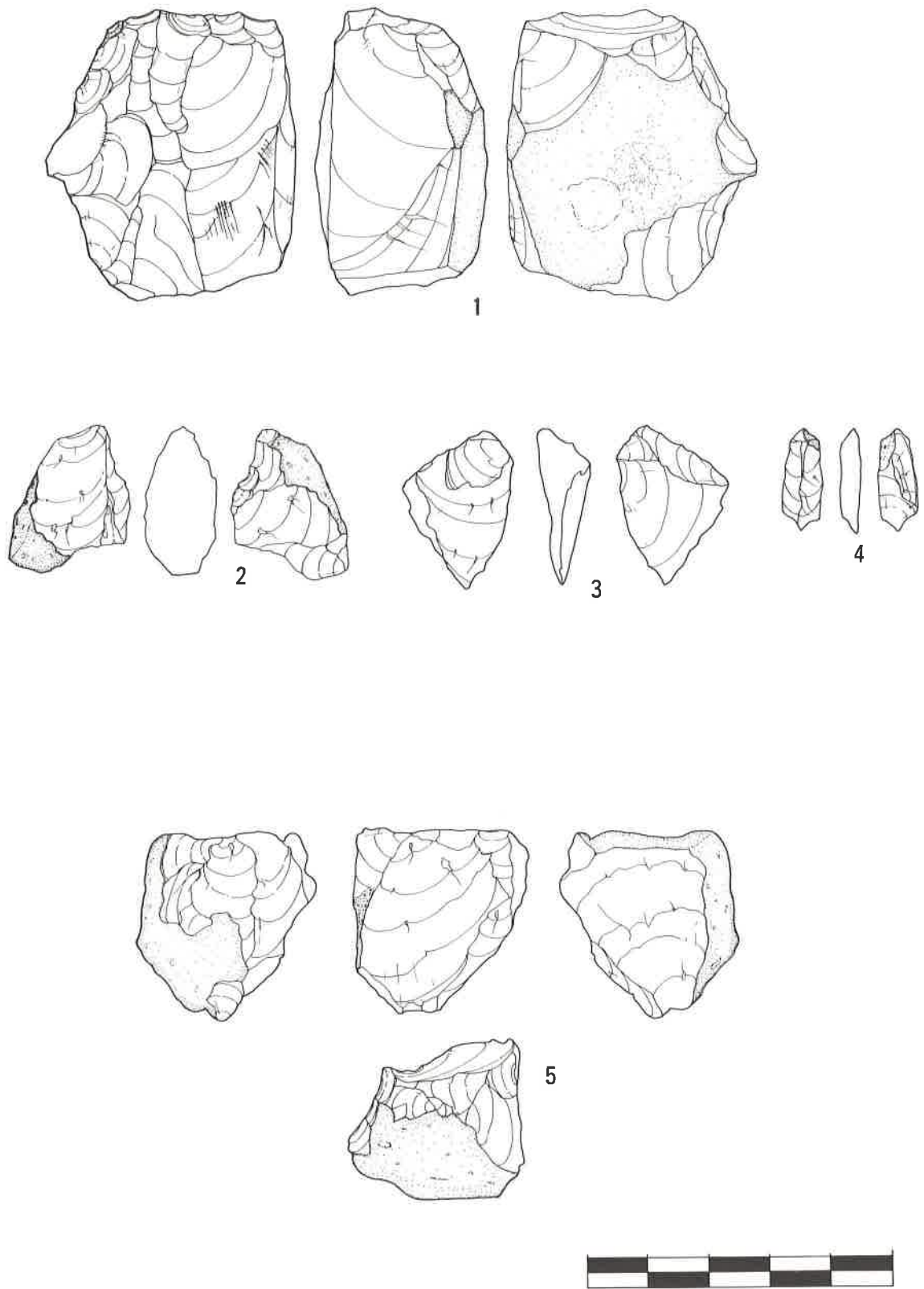
#### 1. 第2トレンチ (第4・5図)

第2トレンチはI層は耕作土で、II層以下V層まで確認することができた。II層は黒色有機土層で、III層上面まで削るとこの黒色有機土層を埋土とする柱穴が検出された。ピット内部には遺物などは確認できなかった。ピットの配列や大きさなどから建物跡になる可能性がある。遺物は旧石器時代のものが出土している。第5図の1はチャート製の石核で、一部自然面を残す。2～4は黒曜石製の剥片である。すべて黒曜石Aである。

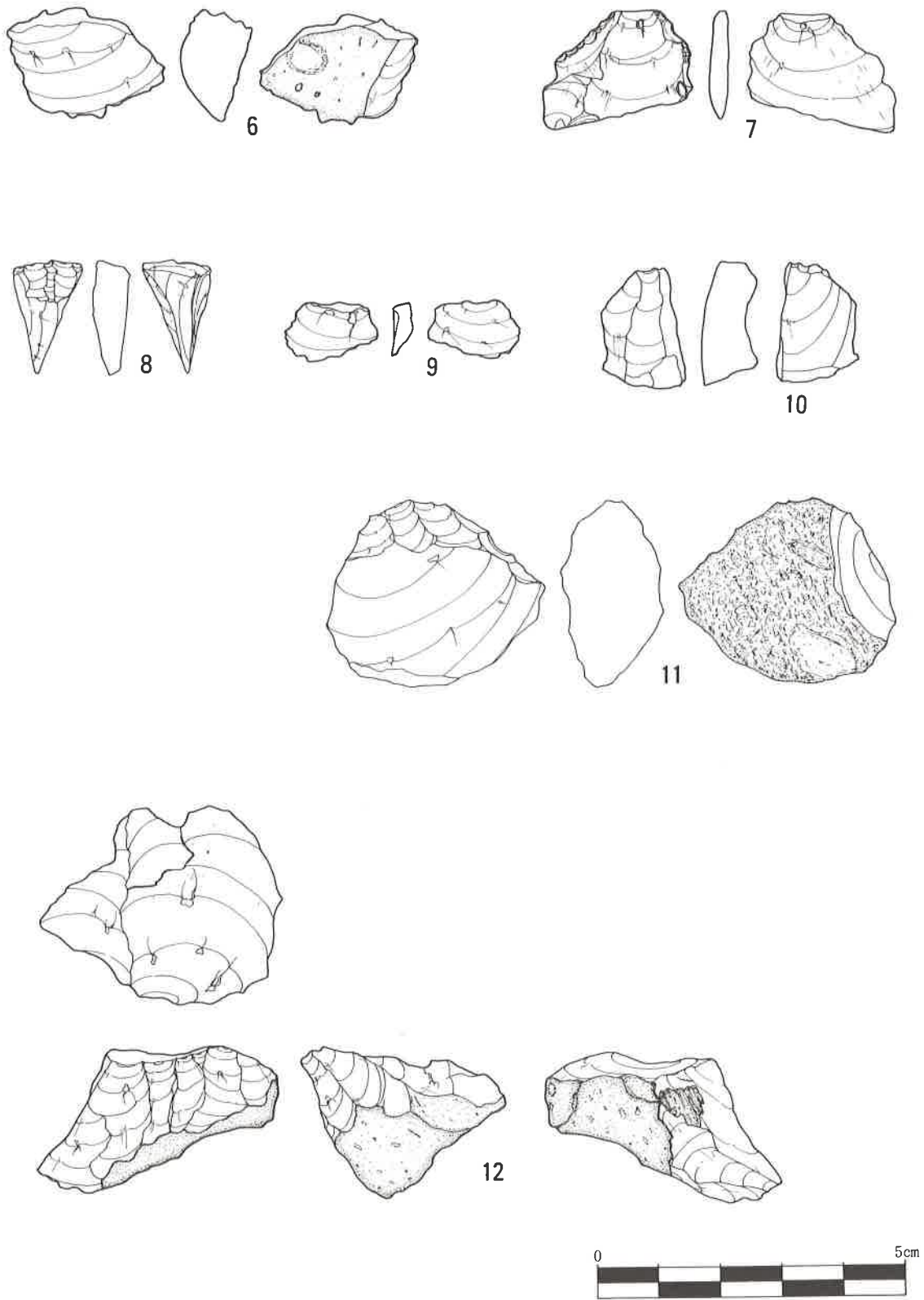


第4図 掘立柱建物跡

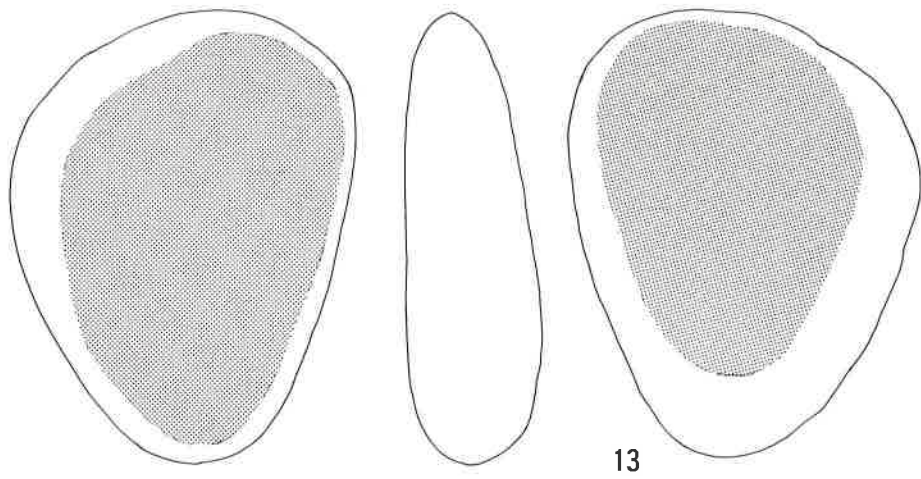




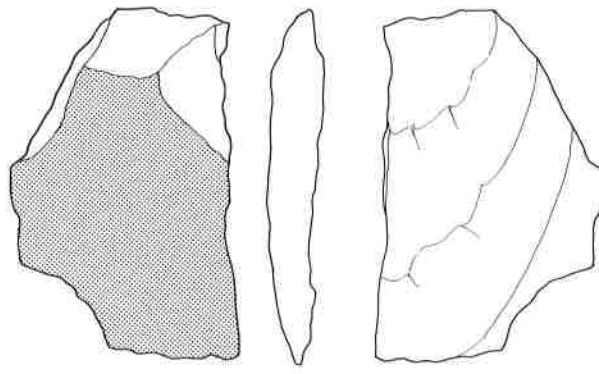
第5図 トレンチ出土遺物（一）



第6図 トレンチ出土遺物（二）



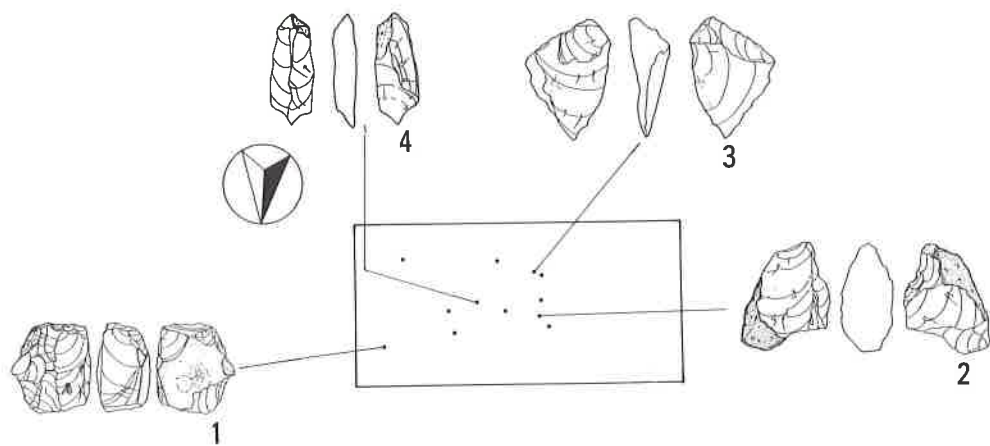
13



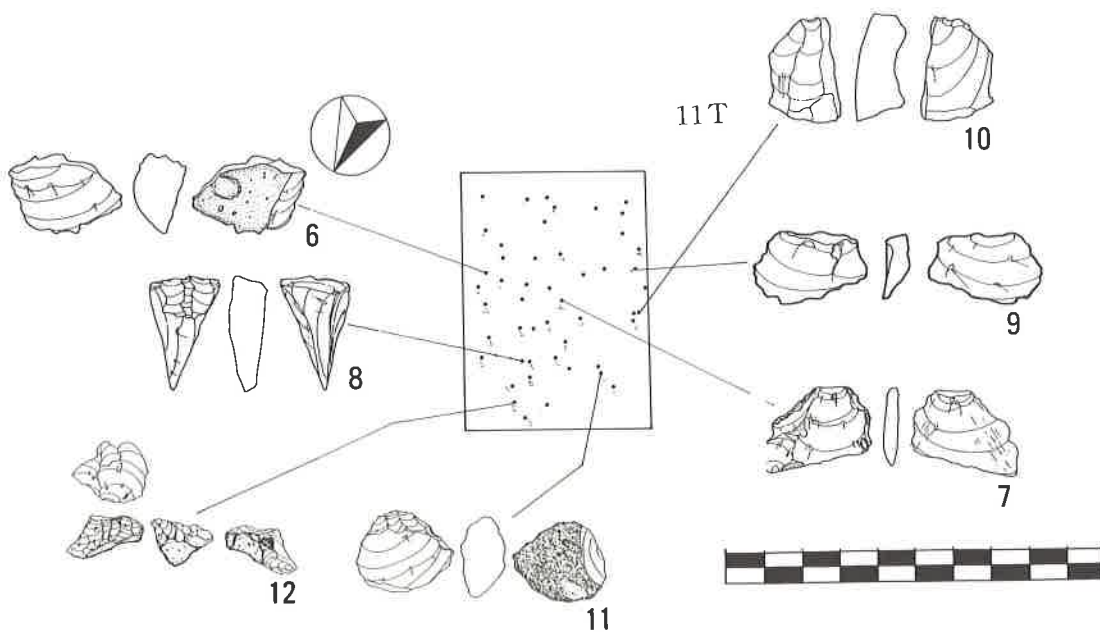
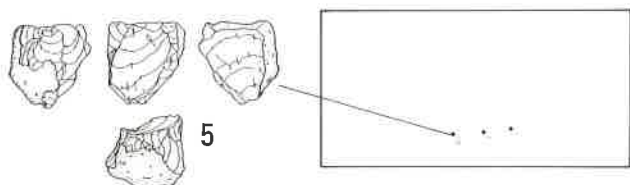
14



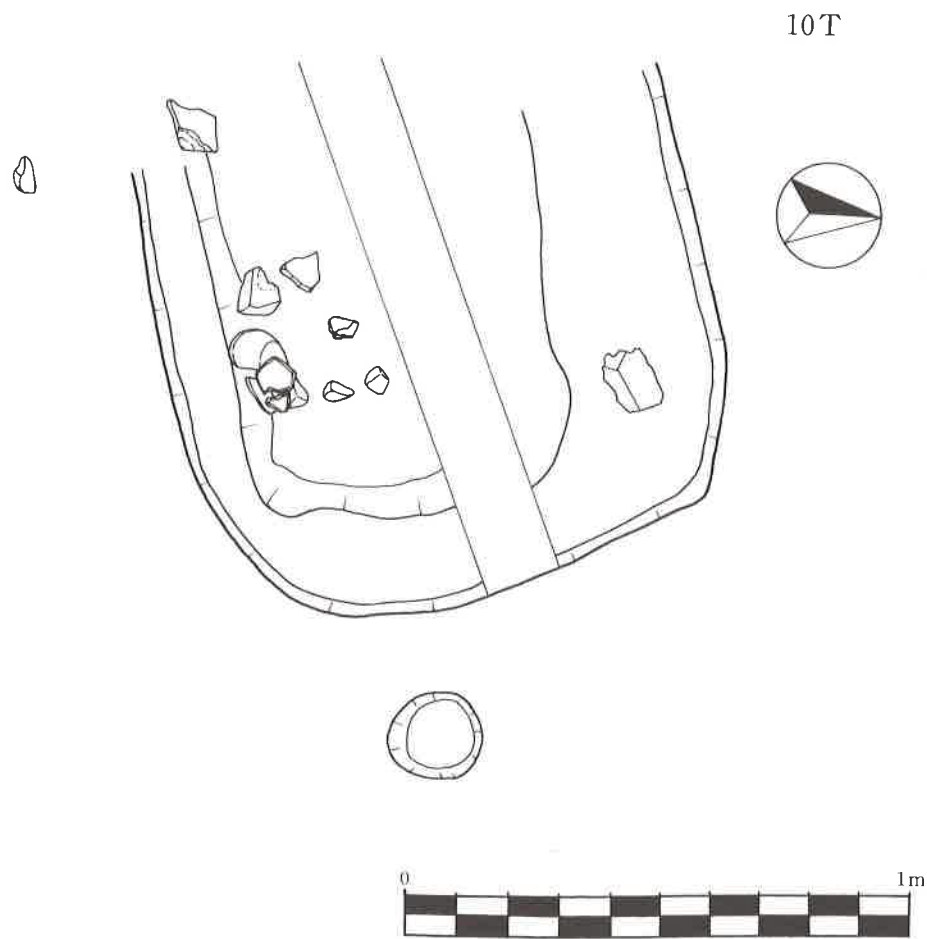
第7図 トレンチ出土遺物（三）



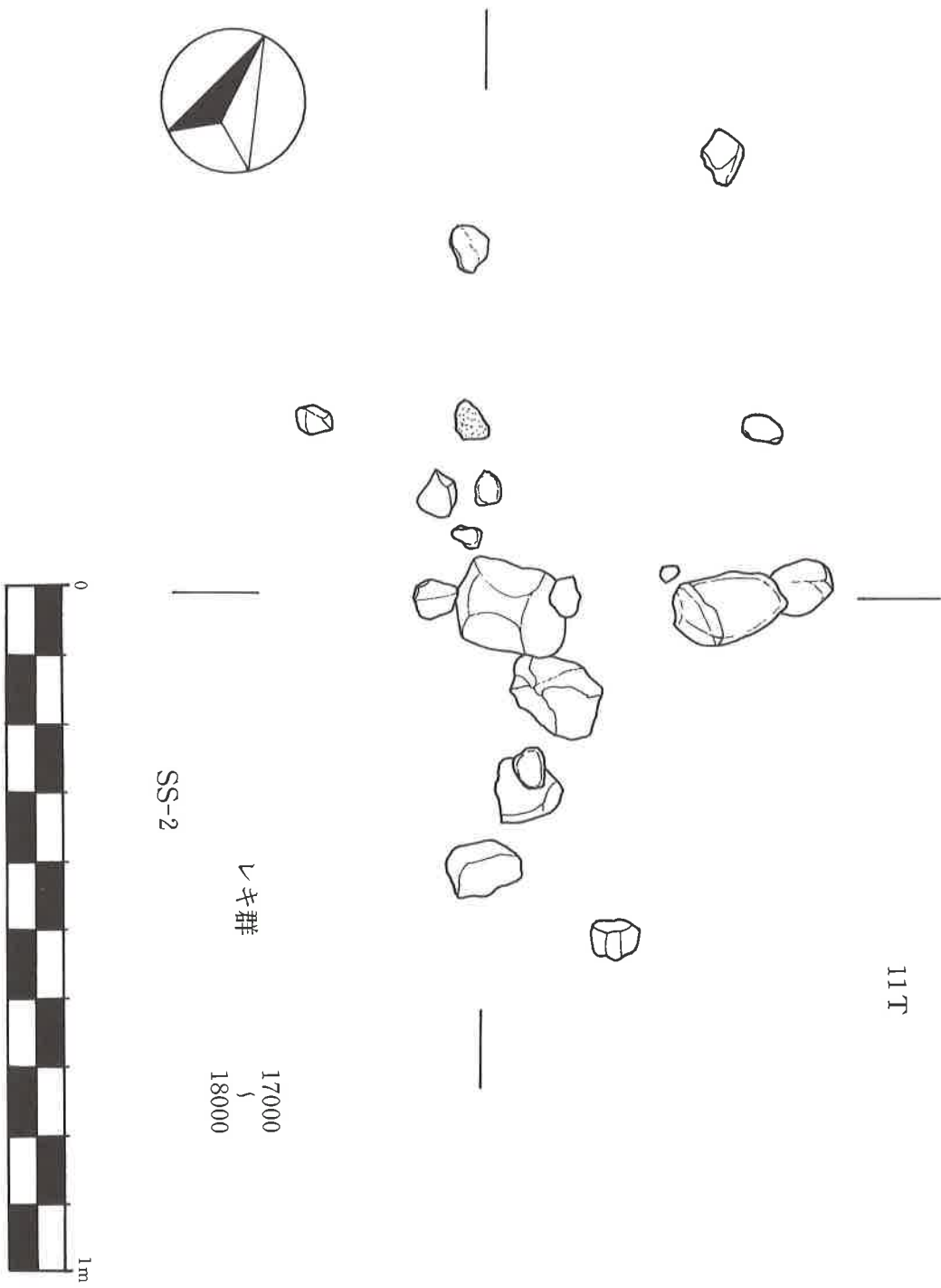
10T



第8図 出土遺物分布図



第9図 掘り込みを持つ石集遺構 (SS-1号)



第10図 石集遺構 (SS-2号)

## 2. 第10トレンチ (第5・9図)

第10トレンチは、耕作土直下はすぐにV層になっており、旧石器の遺物が出土した。第5図の5は黒曜石製の石核である。石材は黒曜石Bに分類される。遺構は掘り込みのある石集遺構が1基検出された(第9図)。長方形に近い掘り込みに凝灰岩製の礫を円形に配置している。またこの礫は偽石器の可能性もある。遺構はすべて掘り下げず埋め戻して保存した。

## 3. 第11トレンチ (第6・7・10図)

第11トレンチはI層は耕作土で、II層以下V層まで確認することができた。出土した遺物は古墳時代と旧石器時代のものである。第7図の13は、砂岩製の磨石で、両面ともよく研磨痕が残っている。II層からの出土である。14は凝灰岩製の磨石で、磨石の欠損部分である。表面に研磨痕がのこる。II層からの出土である。第6図の6～12は、すべてV層からの出土で旧石器時代該当の遺物である。6は黒曜石製の剥片である。石材は黒曜石Aに分類される。黒曜石の原石の自然面が残る。7は黒曜石製の剥片で、黒曜石Aに分類される。8は黒曜石製の作業面調整剥片と思われる。黒曜石Aに分類される。9は剥片で、黒曜石Bに分類される。10は黒曜石製の剥片で、黒曜石Aに分類される。11は黒曜石製の石核で、黒曜石Aに分類され、黒曜石原石の自然面を残す。12は黒曜石製の石核で、黒曜石Aに分類される。黒曜石原石の自然面を残す。原石から分割した剥離面部分を打面として、細かな剥離を施している。

遺構としては旧石器時代の石集遺構が1基検出されている。中心部に比較的大き目の礫を配置し、その周辺部に小さ目の礫を配置する。

表2 確認調査出土遺物観察表

図	番号	遺物番号	出土区	層	器種	石材	重量	備考
5	1	61	2 T	V b 下	石核	チャート	74 g	
	2	72	2 T	V a	石核	黒曜石 A	5 g	
	3	69	2 T	V b	剥片	黒曜石 A	3 g	
	4	64	2 T	V b	剥片	黒曜石 A	1 g	
	5	55	10 T	V b 下	石核	黒曜石 B	26 g	
6	6	47	11 T	IV 下	剥片	黒曜石 A	1 g	
	7	16	11 T	V a	スクレイパー	黒曜石 A	3 g	
	8	38	11 T	V b	作業面調整剥片	黒曜石 A	1 g	
	9	9	11 T	V a 下	剥片	黒曜石 B	1 g	
	10	43	11 T	V a 下	剥片	黒曜石 A	2 g	
	11	28	11 T	V a 下	石核	黒曜石 A	15 g	
	12	32	11 T	V a	石核	黒曜石 A	20 g	
7	13	13	11 T	II	磨石	砂岩	66 g	
	14	36	11 T	II	磨石	凝灰岩	13 g	

## 第4章 戸崎原遺跡全面発掘調査の経過

### 第1節 調査に至るまでの経過

市来町教育委員会は、市来町建設課が進めている戸崎地区漁業集落環境整備事業において開発予定地区に周知の遺跡「戸崎原遺跡」があることを伝え、平成6年度に遺跡の残存範囲を把握するため確認調査を実施した。その結果、古墳時代、旧石器時代等の遺物遺構が検出された。しかし11ヶ所設定されたトレンチの内、遺物や遺構が確認できたのは3トレンチのみで、その他は近世の開墾等により遺物包含層は削平を受けていた。そこで市来町建設課は建設が進められている集落道路部分の調査を依頼し、平成11年度に集落道部分の発掘調査をすることになった。

### 第2節 調査の組織（平成11年当時）

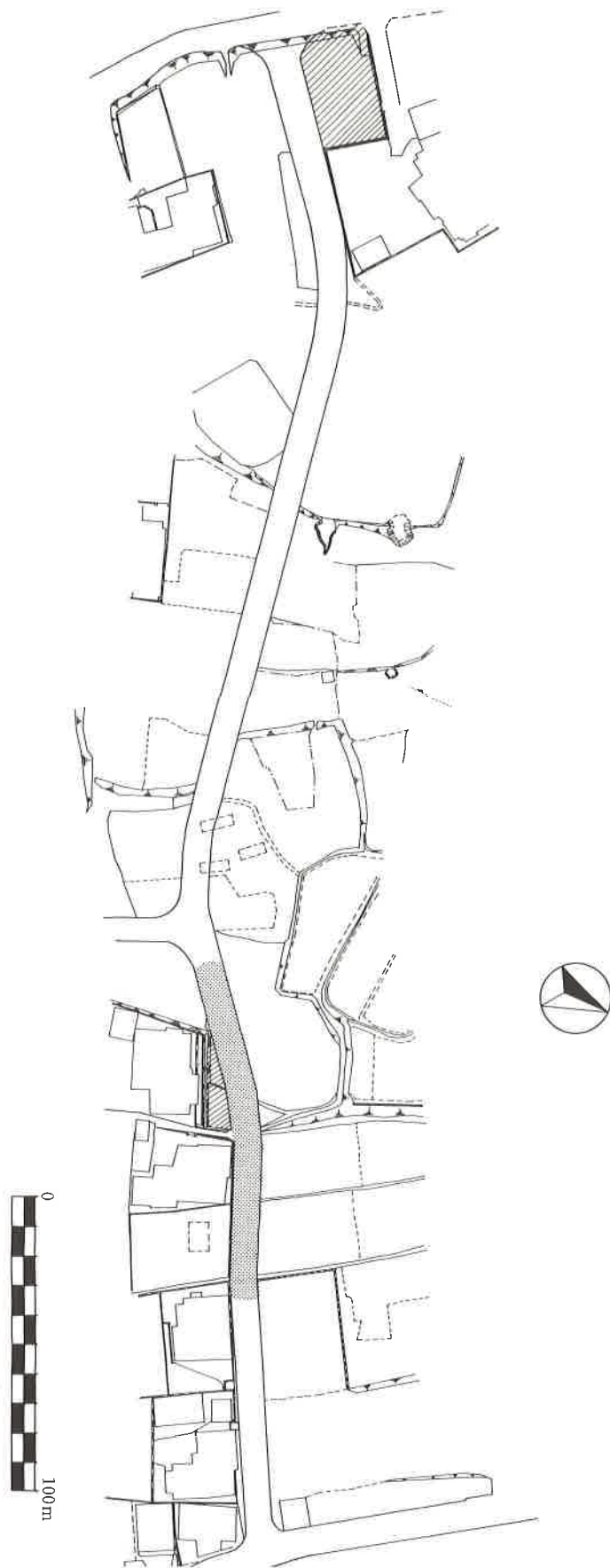
調査主体者	市来町教育委員会		
調査責任者	〃	教 育 長	江 口 英 雄
調査庶務	〃	社 会 教 育 課 長	宇 都 隆 雄
	〃	社 会 教 育 係 長	吉 田 裕 史
	〃	派 遣 社 会 教 育 主 事	宮 司 和 弘
	〃	主 任	芹ヶ野 幸 淑
	〃	主 事	西久保 敏 彦
調査担当者	〃	主 査	新 町 正

### 第3節 調査の経過

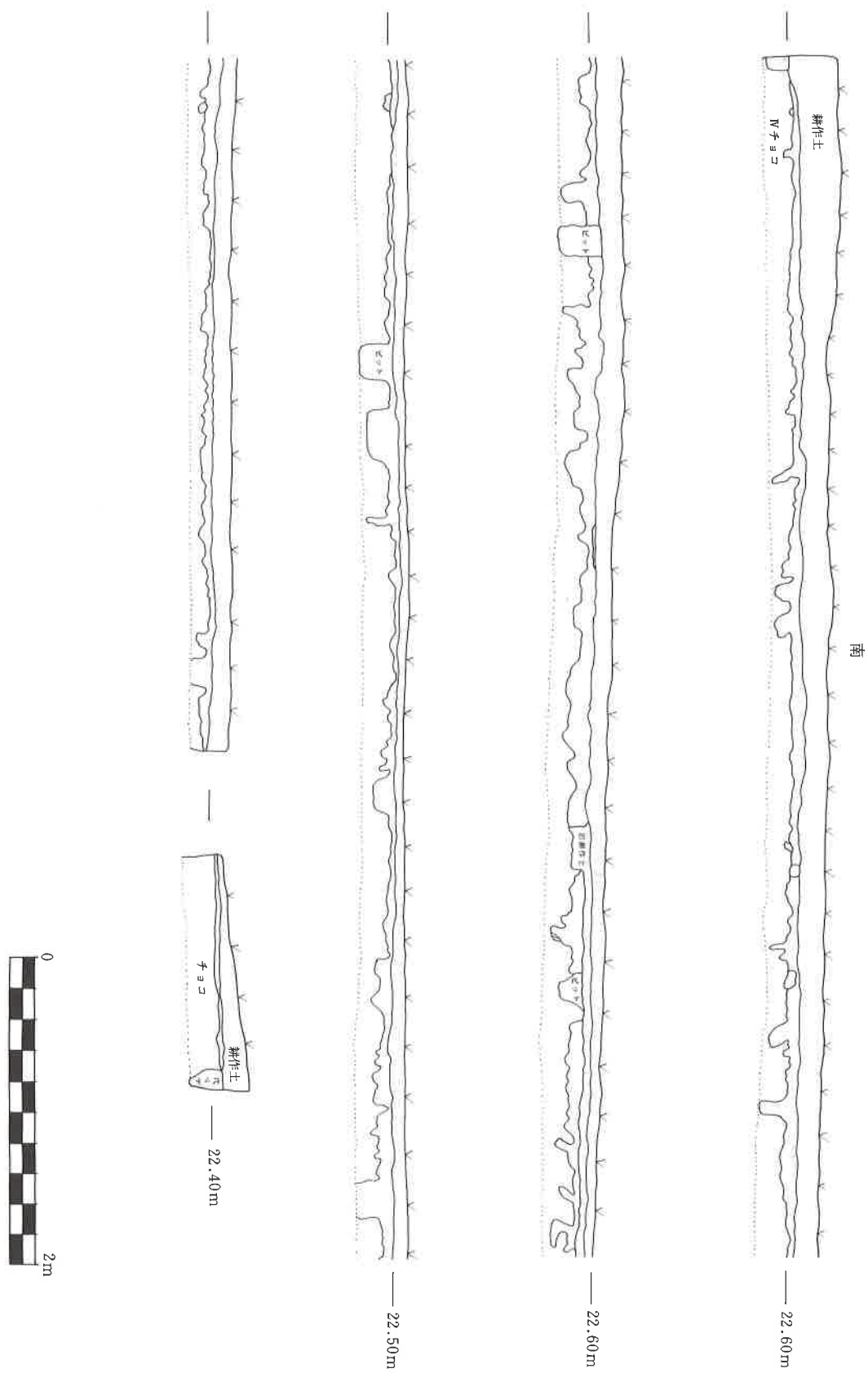
調査は平成11年11月24日（水）から12月10日（金）まで実施された。調査の経過は日誌抄をもつてかえることにする。

- 11月24日（水）重機で表土剥ぎを行なう。
- 11月25日（木）黒色土層の掘り下げ。遺構が検出される。
- 11月26日（金）芋穴の検出、掘り下げ。遺構検出作業。
- 11月29日（月）平成6年度のトレンチ跡（第2トレンチ）確認。IV層掘り下げ。
- 11月30日（火）遺構配置図作成。
- 12月1日（水）IV層掘り下げ。黒曜石破片検出。
- 12月2日（木）土層南壁精査。IV層掘り下げ。
- 12月3日（金）遺物の平板測量。アカホヤ落ち込み確認。
- 12月6日（月）土層断面図作成。
- 12月7日（火）柱穴状遺構実測。V層掘り下げ。細石刃核出土。
- 12月8日（水）細石刃核残片、細石刃出土。
- 12月9日（木）石集遺構検出。実測に入る。
- 12月10日（金）アカホヤ落ち込み掘り下げ終了。実測をする。





第11図 発掘調査部分



第12図 土層断面図 (南東)

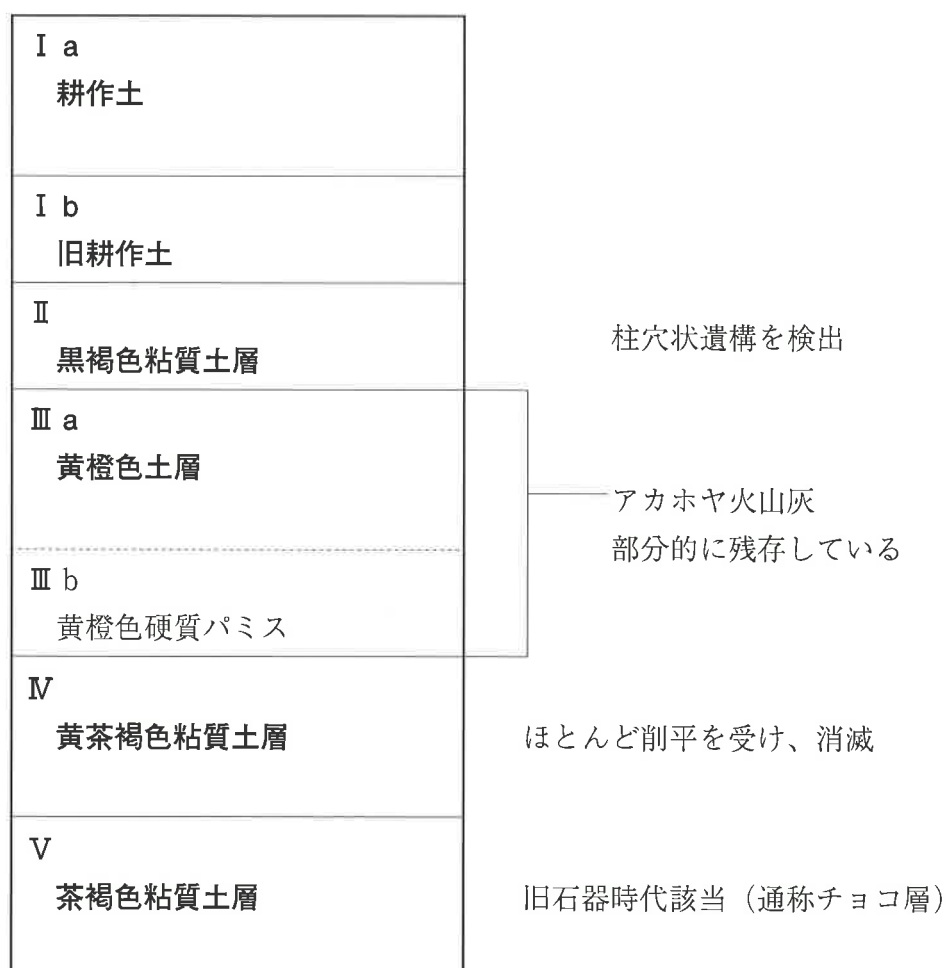
## 第5章 全面発掘調査の概要

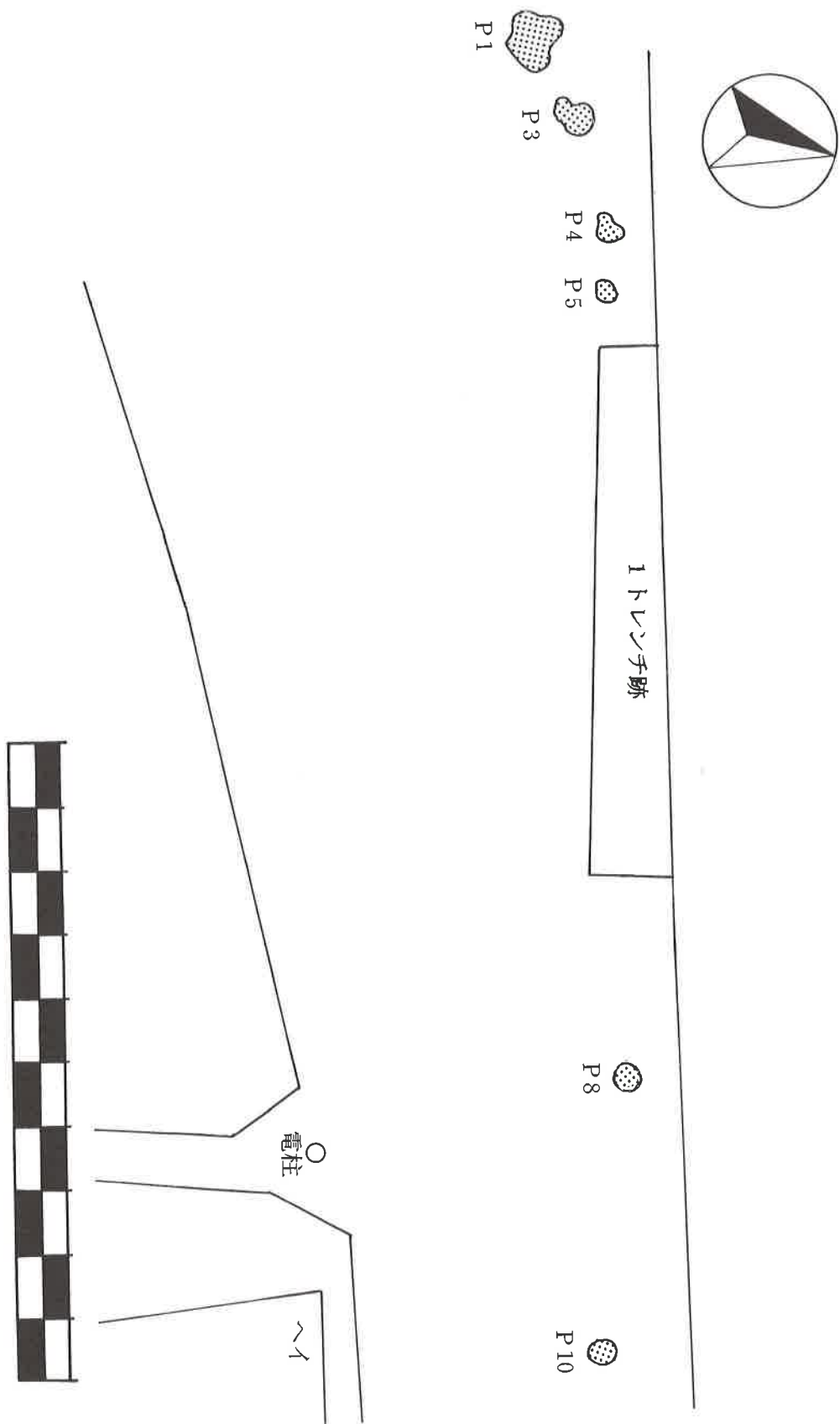
### 第1節 発掘調査

漁業集落環境整備事業予定地が約40,000平方メートルあり、その為平成6年度に11ヶ所トレンチを設け確認調査を実施したところ、事業実施予定地の約1000m<sup>2</sup>に絞ることができた。更に、平成11年度に漁業集落環境整備事業に伴う2号集落道路建設を予定している市来町建設課は、道路建設予定地にかかる約45m<sup>2</sup>（図11参照）の遺跡の全面発掘調査を依頼した。市来町教育委員会は確認調査で判明している遺物包含層（Ⅱ層上面）までの土層をバックホーを使用し、廃土を行なった。その結果、確認調査で検出されたⅢ・Ⅳ層は大部分が削平を受け、Ⅱ層直下はⅤ層であった。

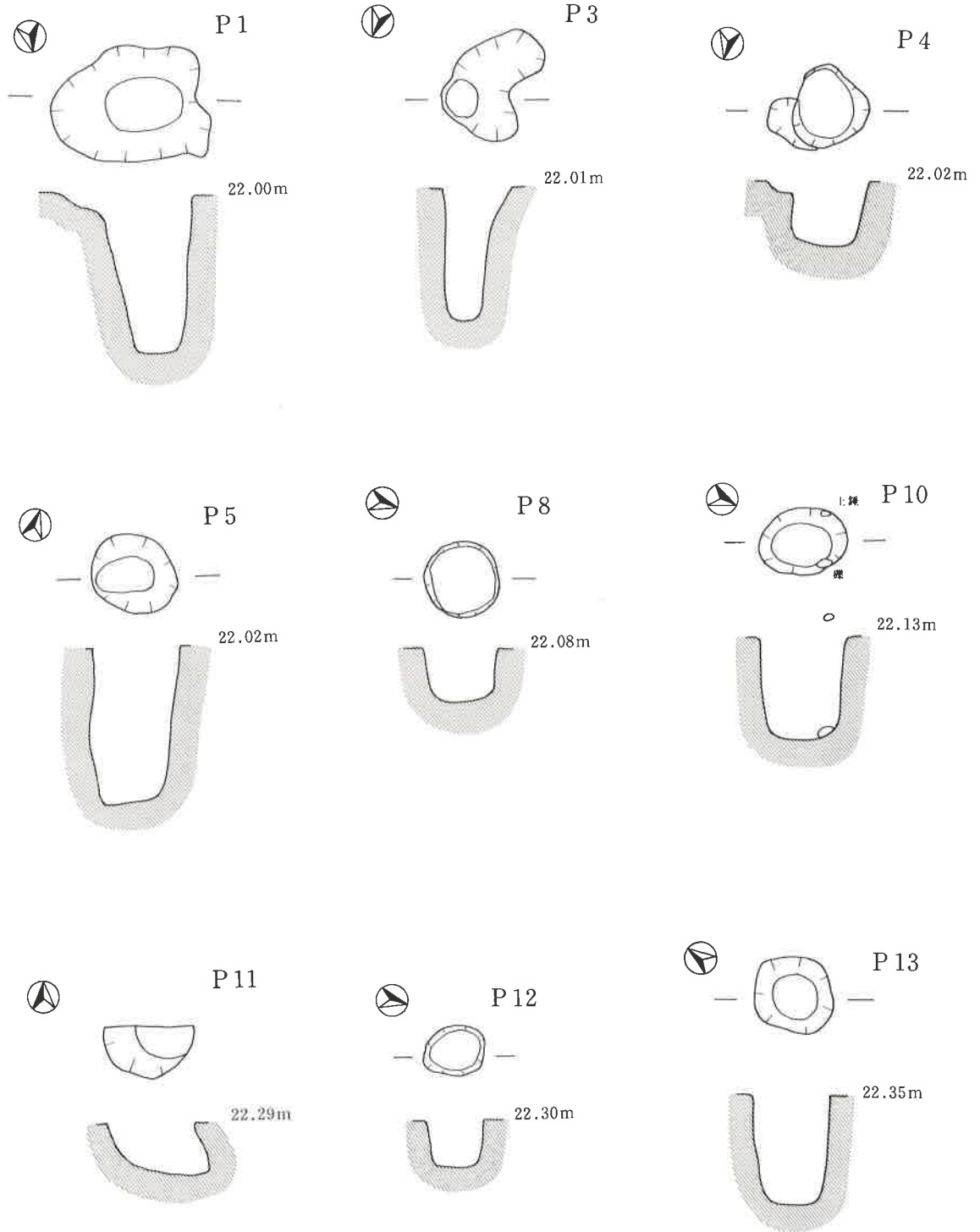
### 第2節 調査区の土層

発掘調査部分の土層については図12の土層断面図を参照。

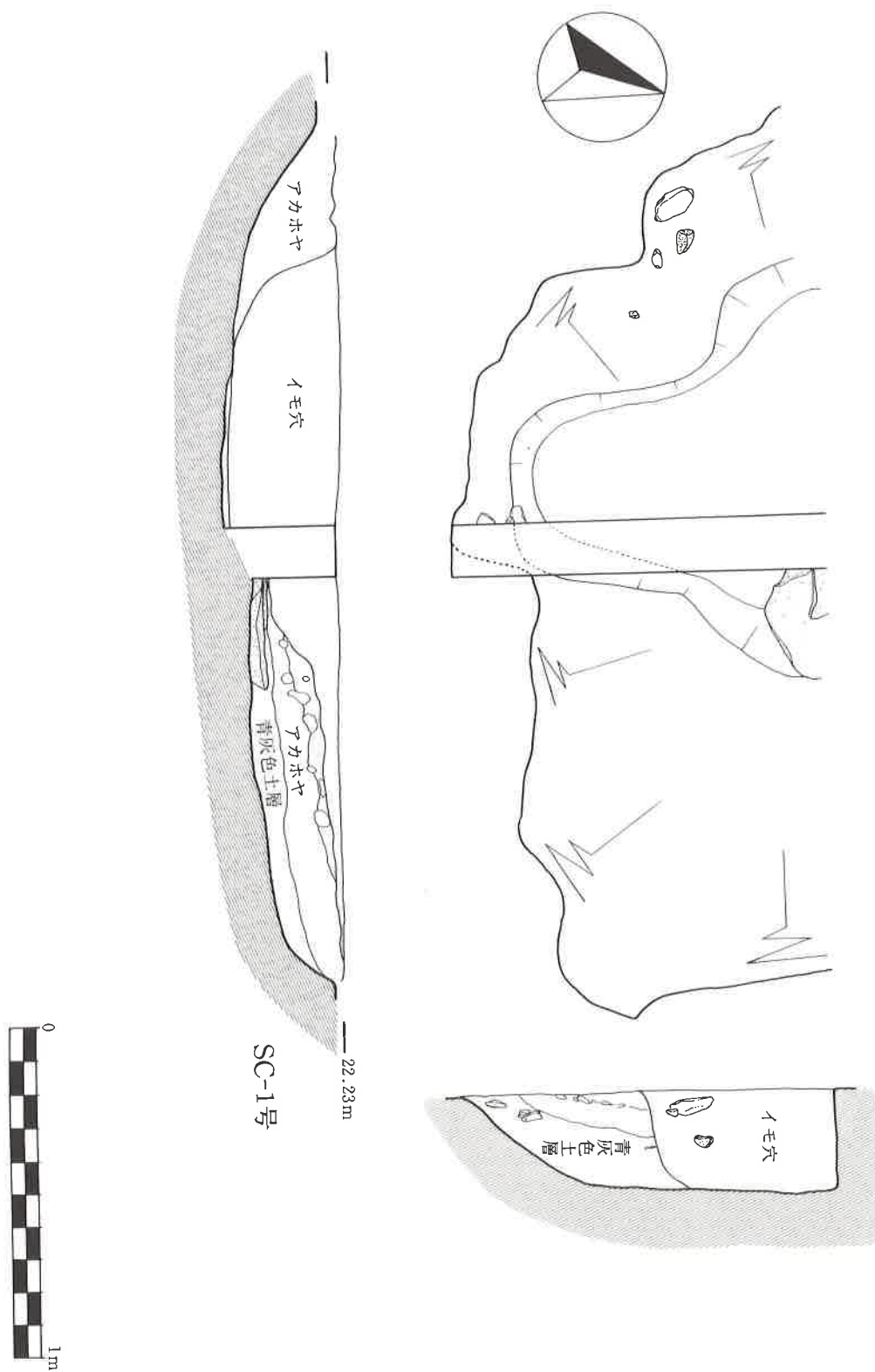




第13図 PIT配置図



第14図 柱穴遺構図



第15図 住居址状遺構 (SC-1号)

## 第6章 II層出土遺物遺構の概要

### 第1節 II層出土遺物

II層は黒褐色粘質土層で、確認調査で成川式土器・土師器などが確認されている。今回の調査では、土師器片、土錘、成川式土器片？の小片が検出されたのみである。小片のため図化していない。

### 第2節 II層出土遺構（図13・14）

II層を掘り下げ、V層上面で柱穴状遺構を確認することができた。遺構は全部で9あり、掘建柱建物跡となるべく規則性を持って並んでいたものはない。

表3 柱穴状遺構一覧

ピット番号	長軸	短軸	深さ	出土遺物等
P 1	40cm	35cm	50cm	なし
P 3	22cm	—	42cm	なし
P 4	25cm	24cm	20cm	なし
P 5	27cm	25cm	50cm	なし
P 8	24cm	24cm	17cm	なし
P 10	28cm	21cm	32cm	なし
P 11	23cm	—	14cm	なし
P 12	19cm	16cm	14cm	なし
P 13	25cm	24cm	34cm	なし

## 7章 III層出土遺物遺構の概要

### 第1節 III層出土遺構（図15）

III層は黄橙色硬質パミス混じりの黄橙色土層で、喜界カルデラから噴出したアカホヤ火山灰に該当する。先にも述べたとおり、II層からV層までの間の層は削平を受け、消滅している。しかし、発掘調査部分の一部に落ち込みがあり、この落ち込みの中の埋土としてIII層が堆積していた。III層の堆積は極めて自然に堆積しており、アカホヤ火山灰が降ってくる約六千四百年前直前まで窪みが存在していたことを物語っている。更に、削平を受け消滅していたIV層も堆積しているのが確認できる。この窪みを風倒木の痕跡と解釈することも可能だが、たいていの風倒木は水平に堆積していた土層が転んだ形で検出されており、この戸崎原のそれには当たらない。それではアカホヤが降下する以前の風倒木の穴ではないかとも考えたが、根が持っていた土層が検出されないのがおかしい。また、この落ち込みを精査したところ、石皿らしき礫（その大部分が敷地外のため今回は取り上げなかった。）と複数の礫が検出された。これらの状況から考えて、縄文早期（IV層）該当の住居跡の可能性が高いと思われる。ここでは住居址状遺構と呼ぶことにする。

表4 住居址状遺構

ピット番号	長軸	短軸	深さ	出土遺物等
SC-1	—	260cm	35cm	石皿？・礫

## 第 8 章 V 層出土遺物遺構の概要

### 第 1 節 V 層出土遺物 (図16・17)

V層は茶褐色粘質土層で、旧石器時代に該当する。出土遺物は図16の通りである。15は黒曜石製の細石刃核である。石材は黒曜石Aに分類される。作業面は1ヶ所で5つの剥離痕が見受けられる。16～19は黒曜石Aによる細石刃である。16は上部と下部が折られている。17は上部部分である。18は上部と下部が折られている。19は上部部分である。20～25は黒曜石Aの剥片である。

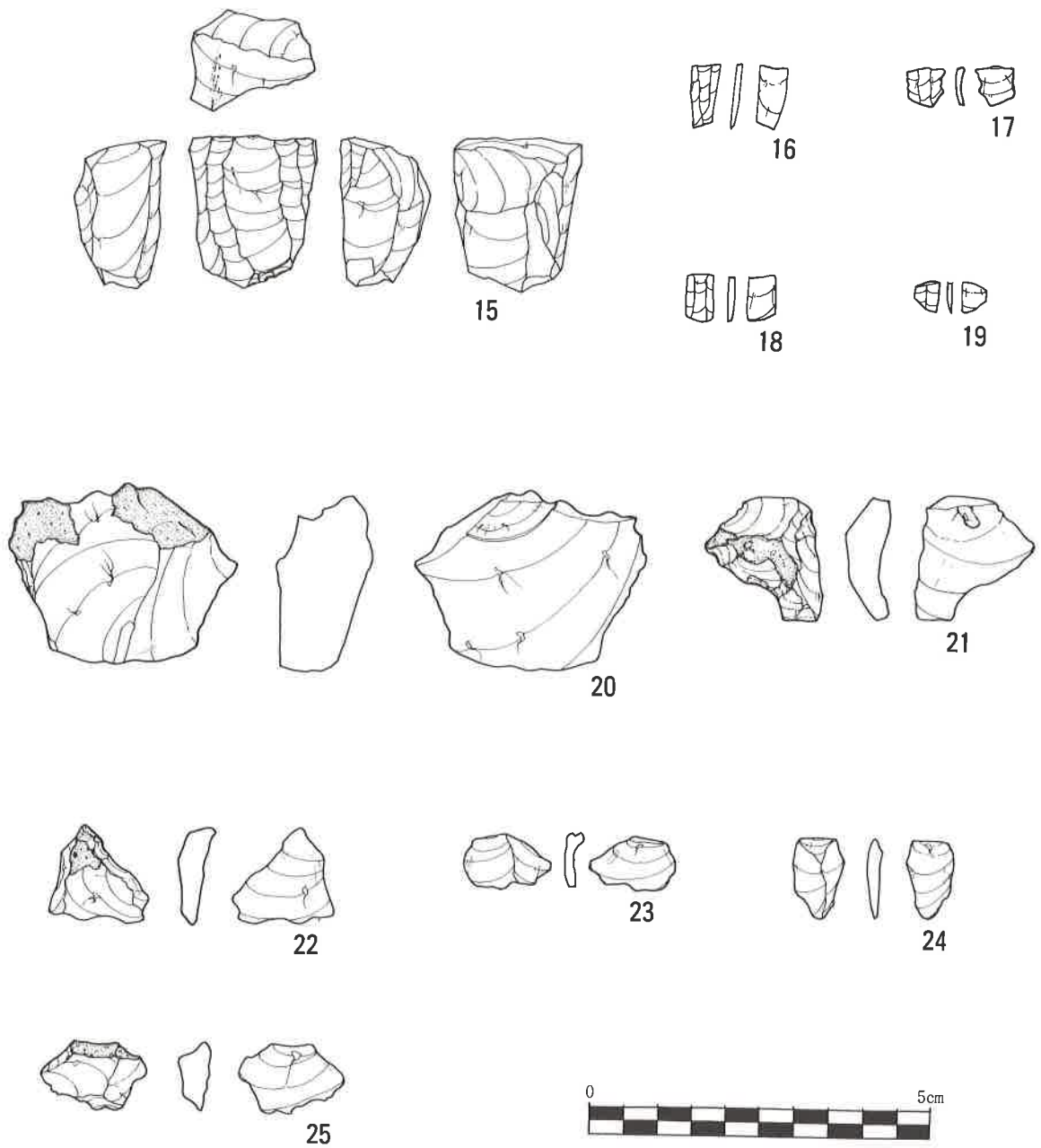
### 第 2 節 V 層出土遺構 (図16)

遺構は石集遺構が1基検出された。確認調査で検出された掘り込みのある石集遺構とは異なり、またPITなども検出されなかった。礫のまとまりも多くはない。

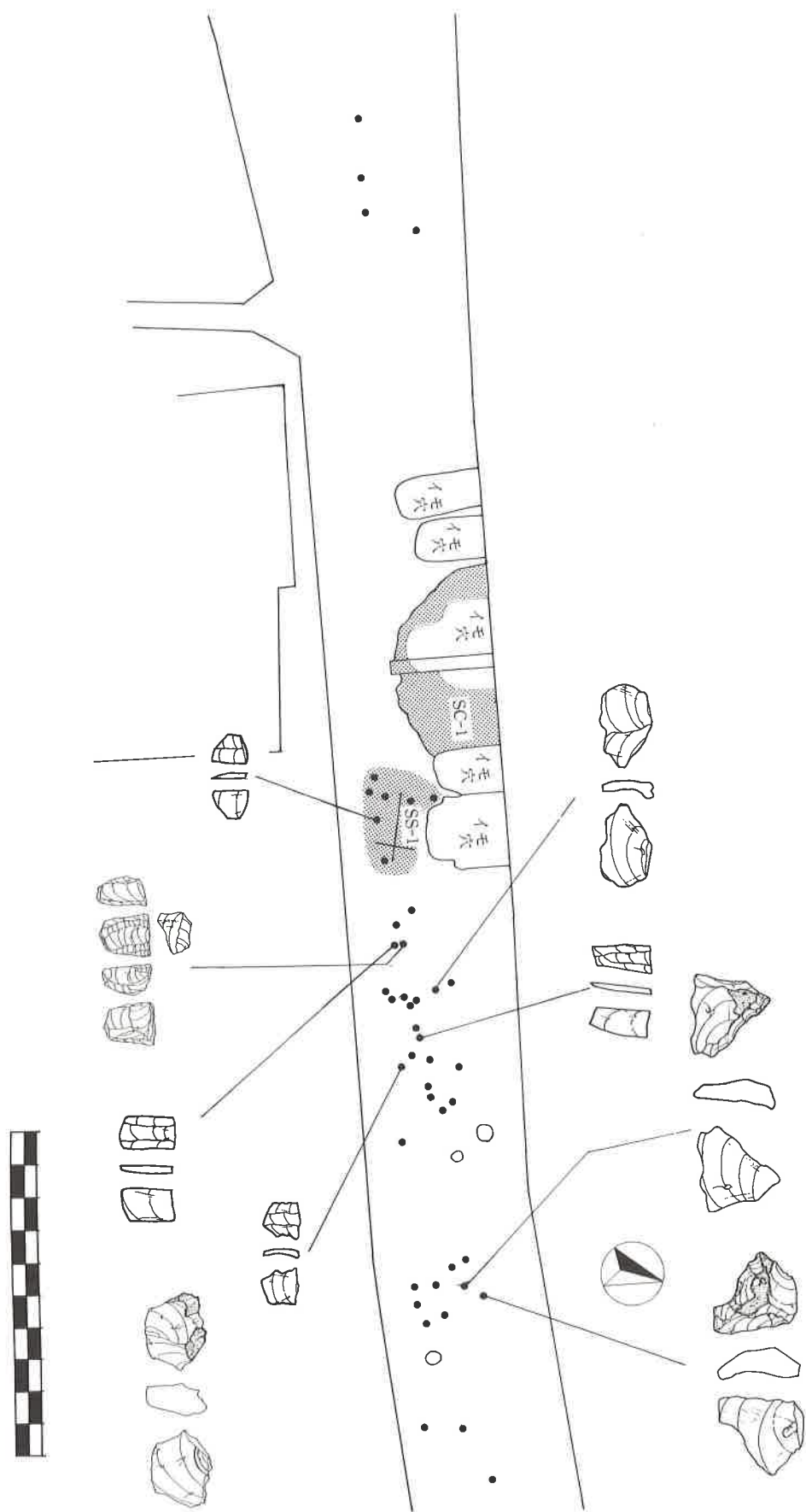
表 5 全面発掘調査出土遺物観察表

図	番号	遺物番号	出土区	層	器 種	石 材	重 量	備考
		30	全 面	V	細 石 刃 核	黒曜石 A	6 g	
		37	全 面	V	細 石 刃	黒曜石 A	0.2 g	
		39	全 面	V	細 石 刃	黒曜石 A	0.2 g	
		45	全 面	V	細 石 刃	黒曜石 A	0.2 g	
		26	全 面	V	細 石 刃	黒曜石 A	0.1 g	
		19	全 面	V	剥 片	黒曜石 A	12 g	
		51	全 面	V	剥 片	黒曜石 A	1.8 g	
		44	全 面	V	剥 片	黒曜石 A	1 g	
		34	全 面	V	剥 片	黒曜石 A	1 g	
		27	全 面	V	剥 片	黒曜石 A	1 g	
		48	全 面	V	剥 片	黒曜石 A	1 g	

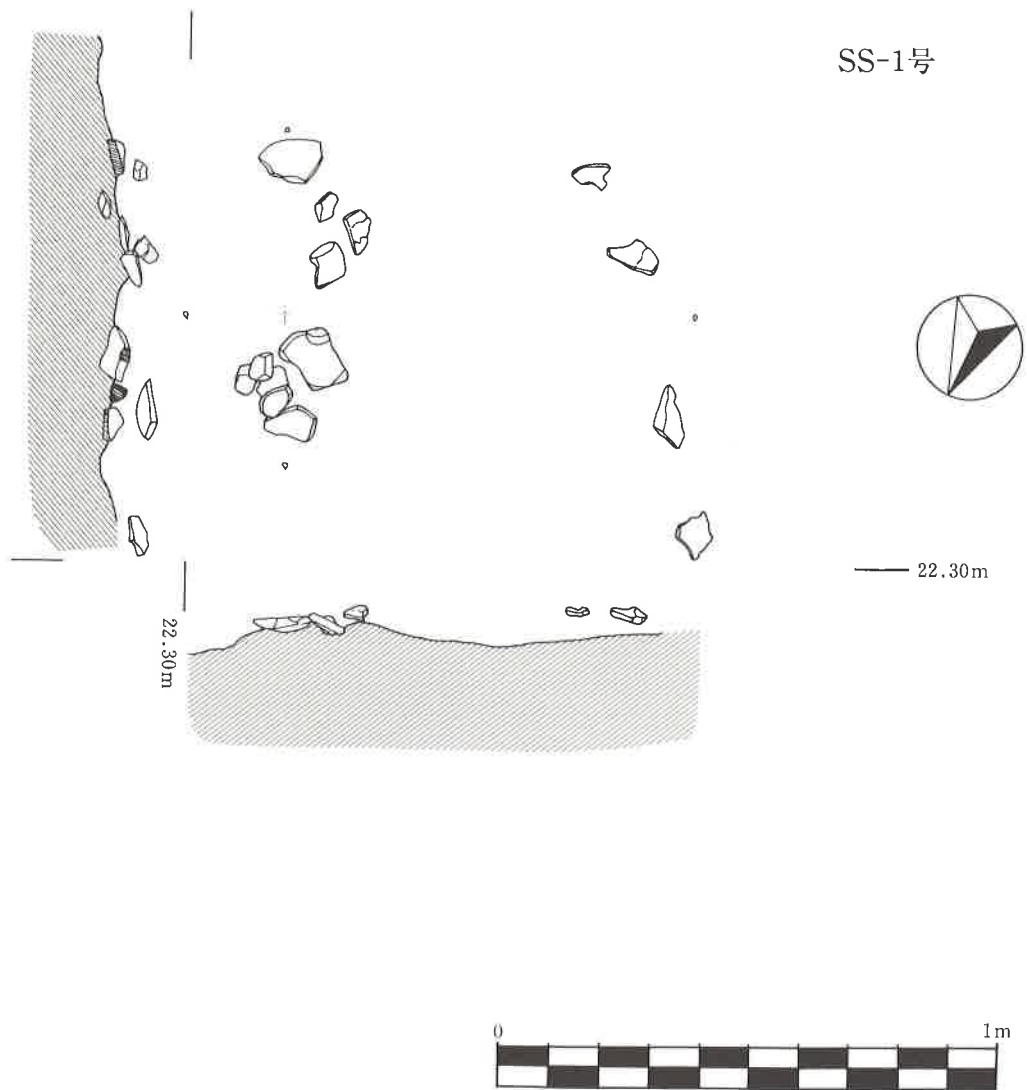




第16図 出土遺物（一）



第17図 出土遺物分布図



第18図 石集遺構 (SS-3号)

## 第9章 まとめ

戸崎原遺跡は、海拔約20mの小丘陵が海に向かって、なだらかに傾斜していく地形に形成された遺跡である。この遺跡は、鹿児島県が出した「平成3年度北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書(1)」において30番目に紹介されている。報告書によると、古墳時代の成川式土器、中世の土師器、近世の陶磁器、その他の遺物として土錘が採集されている。これにより戸崎地区漁業集落環境整備事業における遊楽道路建設予定路線に、11ヶ所のトレンチを設定し、発掘調査の迅速化を図るために小型バックホーにより表土の排除作業を調査員立会いのもと行なった。それにより、1トレンチ・3～9トレンチが土層検出面においてシラスを検出し、遺物包含層が後世の畑地開墾等により削平を受け、消滅している事が判明した。2・10・11トレンチにおいては近世の掘建柱建物跡や成川式土器を出土した古墳時代の溝、旧石器時代の遺物があることがわかった。また、10トレンチにおいて検出された、掘り込みのある石集遺構は県内でもめずらしい。更にこの石集遺構には近接してピットが確認された。これはシラスの二次堆積にV層の暗茶褐色粘質土層が落ち込んでいるので時代的には旧石器時代に該当するピットで間違いはない。このピットが石集遺構とセット関係なのか今のところこの1基のみであり、今後の類例の増加に期待したい。

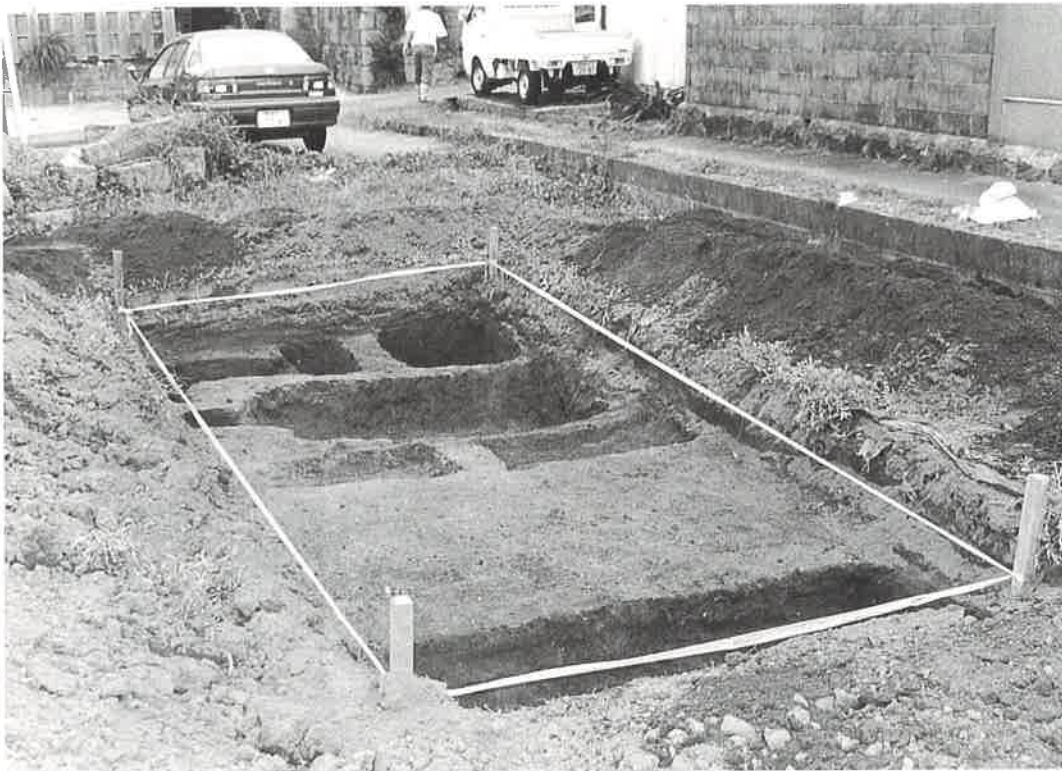
平成11年度に実施された全面発掘調査に関しては、平成6年度に確認された掘り込みを持つ集石遺構は確認できなかったが、集石遺構が1基検出され、付近では細石刃核及び細石刃が出土し、細石器文化のものであることが判明した。また、縄文時代の落ち込みは石皿らしい石が下場底面に確認され住居址の可能性が大いに考えられた。アカホヤの堆積状況から少なくともアカホヤ火山灰が降下する直前まで窪地になっていたことは明白である。またこの時期によく見られる土層横転とも異なる。残念ながら今回の調査では柱穴や遺構すべての調査は出来なかった。

以上、2回の調査において遺跡の性格がおおよそ絞られ、中には貴重な遺物遺構が埋没している事が判明した。

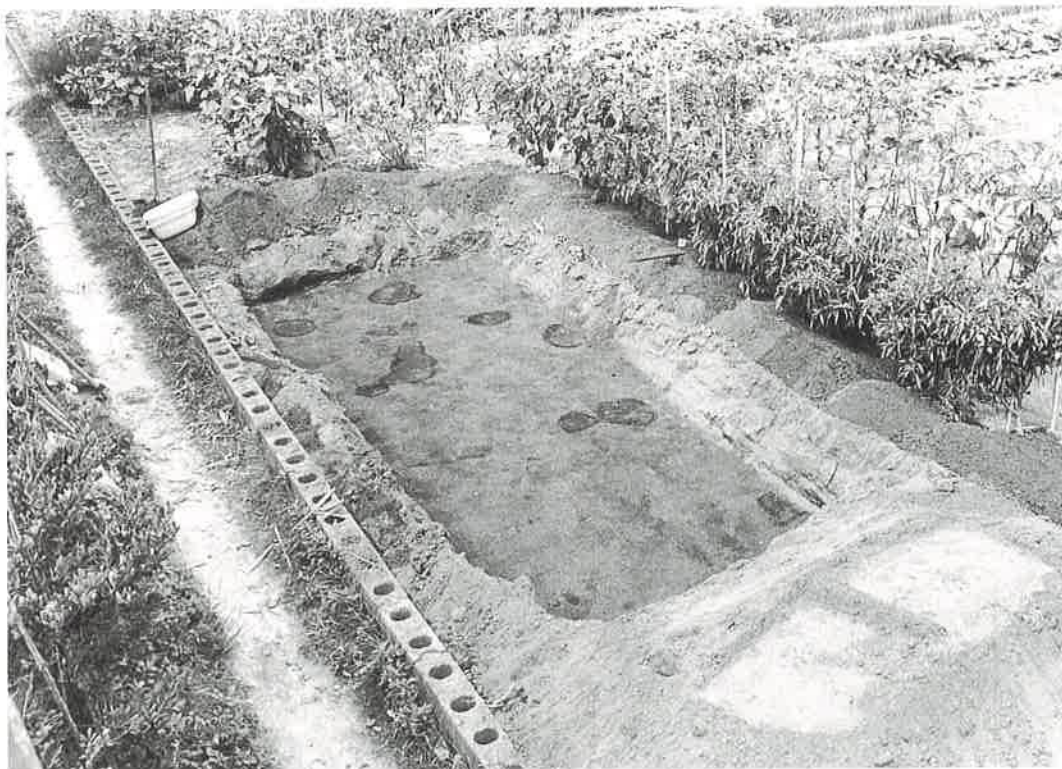


# 圖 版





1 トレンチ（イモ穴検出）

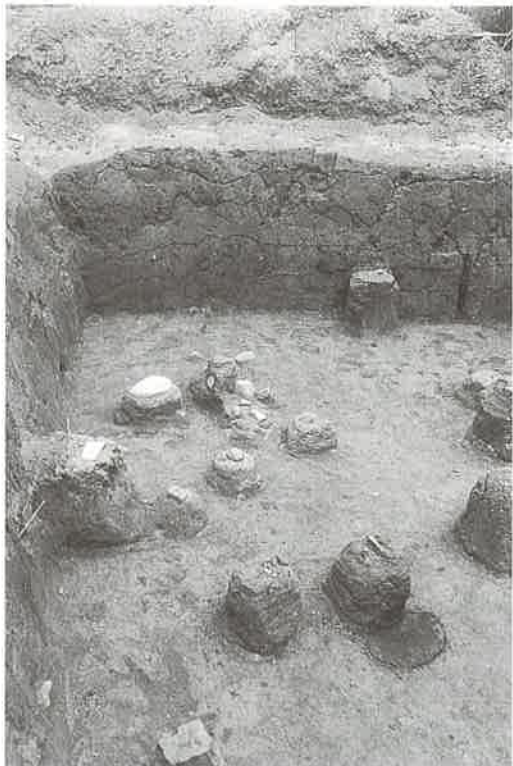


2 トレンチ（PIT検出）





10トレンチ集石遺構と遺物出土状況



11トレンチ集石遺構と遺物出土状況



土層堆積状況



アカホヤ落ち込み確認



PIT 1/2CUT



アカホヤ落ち込み掘り下げ



旧石器遺物出土状況



細石刃核



細石刃



石核出土状況



集石遺構検出状況

戸崎原遺跡出土遺物（一）



1



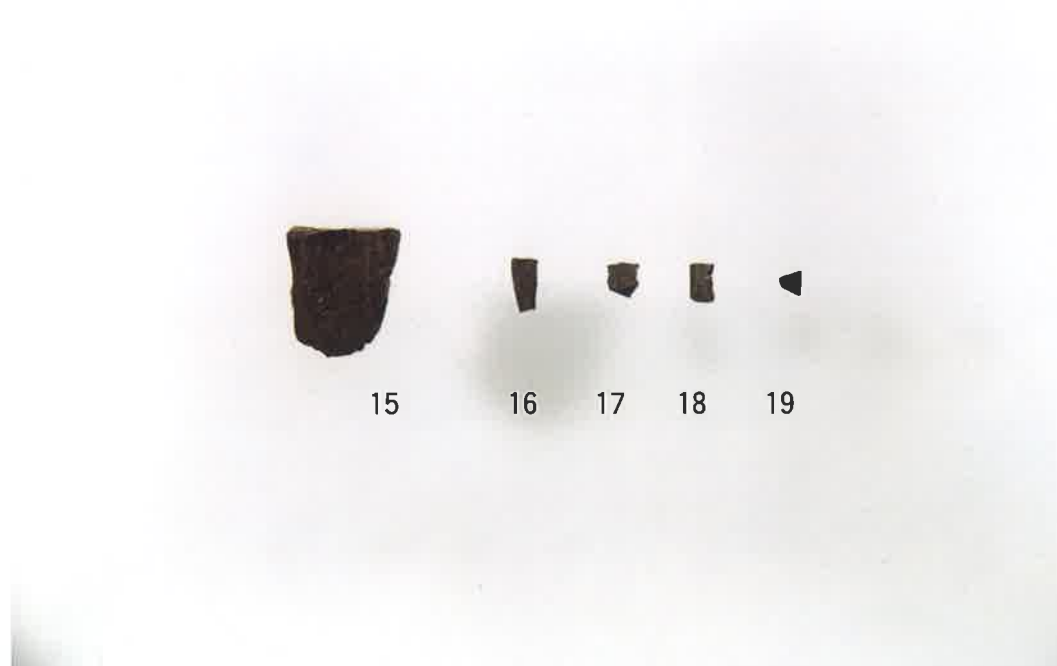
5



11



12



## あ と が き

梅巖寺跡発掘調査は平成5年度、戸崎原遺跡確認調査は平成6年度と6～7年前に調査を実施した遺跡の報告書をこうして今年度作成することができて本当にうれしい。どこの担当者もそうかもしれないが、発掘調査が忙しく報告書刊行が遅れがちになってしまうのが現状であろう。調査を担当した私も、当時を思い出しながらの報告書作成で、また町単独の事業であるため、予算も厳しい中での刊行である。

この報告書作成にあたって私の右腕となって実測、トレースなどに協力頂いた児玉千香子、坂口ひろ子、松崎道子の各氏、また地元出身者ということでご指導ご協力頂いた出口浩氏に対し深く感謝の意を表します。

### 市来町埋蔵文化財発掘調査報告書

市来町湊土地区画整理事業江郷墓地整備基本計画に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

### 梅巖寺跡

戸崎地区漁業集落環境整備事業集落道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

### 戸崎原遺跡

発行日 平成13年3月31日

発 行 市来町教育委員会

〒899-2192 鹿児島県日置郡市来町湊町3305番地

印 刷 (株)朝日印刷

〒890-0055 鹿児島市上荒田町854-1





